

---

# 隊長の二次創作短編集

ペンギン隊長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隊長の二次創作短編集

### 【Nコード】

N9762N

### 【作者名】

ペンギン隊長

### 【あらすじ】

内容はタイトルの通り。シリーズものになっているものもありますが、途中で放り投げたり、短編連作式だったりします。タイトルが違う場合、ヒロイン名が同じでも別キャラな事も。

所謂名前変換小説あるいは夢小説として書いたものなので、オリキヤラがこれでもかという具合に出張ります。元になっているのは戦国BASARA2です。3も無印もスルーの方向です。

## 常夜の姫君 1

「父上？」

オレ様ははつとして振り返った。ここは敵の城だっというのに、オレ様としたことが油断していた。

「父上ではないのだな。誰だ？」

オレ様は思わず見とれていた。14、5歳くらいであろう少女がオレ様を見ていた。膝まで届きそうなほど長い射干玉の髪。着ているのは簡素な小袖。そして何より目をひいたのは左右で違う色をした瞳。左は夜空のような紺、右は蜂蜜のような金。

「おい、聞いているのか？何だか城が騒がしいようだが、何か知っているのか？」

オレ様ははつとしてここに来た目的を思い出した。いつものように飄々とした表情を作り、少女に話しかける。

「お嬢ちゃん、オレ様の質問に答えてくれるかい？」

「？某に答えられることならな」

少女は首を傾げて答えた。

「・・・ここ数年、ここの城主は攻撃的になってる。理由知ってる？」

「城主・・・？父上のことか？だが、某はここからでたこと無いので外のことは知らぬ」

「へえ、嬢ちゃん、ここの姫さんなの？」

「然り」

少女はふふん、と腕を組んだ。

「ここ数年とは具体的にはいつから、ということだ？」

「・・・2、3年前くらいからかな」

「2、3年前、というと・・・某が占いを始めてからだな」

オレ様はそれを聞いてびっくり、と眉を動かした。

「嬢ちゃん、占いするの？」

「ああ。百発百中らしいぞ。・・・それにしても、なぜ某を嬢ちゃんと呼ぶのだ？某の名前は嬢ちゃんではないぞ」

「だってオレ様嬢ちゃんの名前知らないし」

「奇遇だな。某も某の名を知らん」

オレ様は耳を疑った。

「自分の名前を知らない、と？」

「然り。昔は覚えておったが最近と呼ぶ者もおらぬ故忘れた」

「・・・親がいるのに？」

「父上は某を一姫としか呼ばぬ」

一姫・・・一番最初に生まれた姫、ということだろう。その姫がなぜここに幽閉されているのか。オレ様は改めてその部屋を見回した。調度品の類はあまり無い。たぶん、城の最上部に作られた隠し部屋という特性上、仕方のないことなのだろう。目をひく物は部屋

の真ん中におかれた文机とたくさんの紙。オレ様はふと興味を覚えてその紙の一つを手にとった。一番右に人の名前とおぼしき物が無骨の男の字で書かれており、その左から細筆の綺麗な女の字でつらと文がかかっている。

「これが一姫さんの占い？」

「そうだ。まあ、某にはそこに何が書いてあるのかよく判らないのだが」

「？一姫さんが書いたんでしょ？」

「確かに書いたのは某だ。だが、某はかな文字しか読めぬ」

オレ様は改めて紙を見てみるがその文は漢字もかなも交ざった物だった。オレ様は一姫の言っている意味がわからず、首を傾げた。

「父上は自動筆記といていたが・・・ふむ、実際にやって見せた方が早いだろうな」

一姫は文机の前に座り、オレ様に紙と筆を差し出した。

「これに何か某に占って欲しいものを書いてみる」

オレ様はちよつと考えた後、紙の端に自分の名前を書いた。一姫がかな文字しか読めないと言うのなら、見られても問題はないだろう。一姫は紙を受け取ると文机にそれをおいて細筆を手にとった。

「見るがいい」

一姫はそういうと、目を閉じて紙の上に筆をやった。一姫の手がすばらしい速さで動き、次々と文字が書かれていく。紙の端まで来たところで、一姫は手を止め、目を開けた。

「読んでみる」

一姫に渡された紙を見してみる。一通り目を通してみるが、いまいち意味がわからない。

「よく意味がわかんないんだけど」

「そんなこと某に言われても困る。暗号化されているらしいからなただ、それは今月のことが書いてあるはずだから、前の方に書いてあることは既に起こったことだと思うぞ」

オレ様は改めて紙の前半部分を見る。翻る赤と白、虎と神は争い、決着は付かず双方に傷跡を残す。風は剣と再会し、されど剣は戻らず、神を守る。・・・これって、今月初めの川中島の戦いのこと？同じような調子の文が続き、あるところでオレ様目をとめた。

城を滅ぼし、風は常夜の姫君を攫う。

「何か面白いことでも書いてあったか？」

ふと、気がつくと、一姫がわくわくした様子でオレ様を見ていた。オレ様は苦笑して答えた。

「オレ様は常夜の姫君を攫うんだってさ」

「常夜の姫君？」

一姫は眉間にしわを寄せた。オレ様が不審に思ってどうしたのかと聞くと、一姫は答えた。

「昔、常夜の姫君という言葉が占いにでたことがあったのだ。・・・確かあれは・・・」

一姫はぶつぶつ言いながら何事か考えていた。オレ様は紙を懷にしまい（ここに残しておくわけにはいかない）、一姫の様子を見ていた。

「そうだ、思い出した。常夜の姫君というのは某のことだ」  
「は？」

確かに、大将からはこの城の城主が何か企んでいるなら攻撃するということを聞いている。そして、オレ様は城主が企んでいるという証拠を見つけた。大将はそれを見たら迷わず城を落とすことを決めるだろう。・・・その時、一姫はどうなるのだろうか。悪くすれば捕虜になり慰みもの、というところだろうか。

「ところで、一つ聞いてもいいか？」

「はい、どうぞ」

「おぬしは誰だ？」

「・・・」

「某を攫うのだろうか？名ぐらい名乗れ」

一姫はふふん、と胸を張った。オレ様は苦笑して答える。

「オレ様は人呼んで猿飛佐助」

「さるとびさすけ？佐助、というのか？」

「ああ。何なら佐助って呼んでよ、一姫さん」

「・・・さっきから思っていたのだが・・・佐助はこの者ではないだろう？」

「・・・なぜそう思う？」

オレ様は目を細めて一姫を見た。

「ここに入ってくることは父上の認めた者にしか許されていない。それに、この者なら入る前に合図をしてくるからな。佐助は合図などしてこなかっただろう?」

確かにオレ様がここに来たのはほとんど偶然みたいな物だから合図なんてしていない。まあ、そもそも合図がなんなのか知らないんだけど。

「合図をせずに入ってくるのは迷子か他国の忍びくらしいものだ」

一姫はそういつて苦笑した。

「この者でないなら某を一姫と呼ぶ理由はないだろう?」

「・・・じゃあ、なんと呼べと?」

「名前で呼べ、といたいところだが、某には名前がない。そうだが、佐助、某を名付けてくれ」

オレ様は思わず間抜けな声をあげた。初対面の相手に名前を付けてくれ?

「・・・ダメか?」

一姫は困ったような目でオレ様を見上げた。(見上げる形になるのはオレ様の方が背が高いから当然のことだが) オレ様は少し迷った後、呟いた。

「・・・サツキ」

「?」

「咲く月、と書いて咲月、というのはどうだい?」

「！・・・それはいいな」

一姫・・・咲月は小声で何度も咲月と繰り返した。そして嬉しそうに微笑んだ。

「それでは今から某の名前は咲月だ。佐助も一姫と呼ばず、咲月と呼ぶのだぞ」

「はいはい、了解」

オレは苦笑して答えた。

「それでは、また改めて攫いに伺いますよ、咲月姫」  
「うむ、待っているぞ」

オレ様が冗談めかしているのと、咲月も冗談のように答えた。そして二人として笑った。

「・・・ホントに占いは当たってたなあ」

「佐助、働け！」

「はいはい、わかってますよ大将、と」

オレ様は向かってきた敵を手に持った手裏剣で斬った。オレ様達はある城に攻め込んでいた。旦那はもう、城主の所についているかもしれない。オレ様が止めるのも聞かないで一人で走っていつちやっただけだな、旦那は。

「大将、オレは旦那の所に行きますね」  
「うむ」

オレ様は大将にそう告げるとさっと旦那の所へ向かった。

旦那を見つけた時、旦那は城主を斬り捨てたところだった。

「旦那、何やっちゃってるの?!」

「佐助か。・・・この者が降伏などしない、斬り捨てると言ってきたのだ。某はお館様を待とうと思ったのだが、この者が斬りかかってきたのでつい、反射的に斬り捨ててしまったのだ」

「・・・そう」

城主はそんな風に死んだとは思えないほど安らかな死に顔をしていた。

「旦那、大将に報告してきたら?」

「うむ、そうでござるな。・・・佐助は来ないのか?」

付いてこないオレ様を不思議に思ったのか、旦那が聞いてきた。

「オレ様、ちょっと行くところがあるから」

「咲月姫、約束通り、攫いに来たよ」

「・・・父上は死んだのか？」

「・・・なぜそう思うの？」

「昨日父上が明日自分は死ぬことになるだろう、とっていたのだ。そして、某に幸せにすることができずにすまぬと」

「・・・」

「佐助が悩むことはない。・・・父上は逃げることもできたのだ。でも、逃げなかった。だからある意味死んだのは父上の自業自得という他はないのだ」

「咲月姫、それはちよつと違うよ」

「何がだ？」

「君の父親は自分の意志で殺されたんだ。理由は知らないけど、安らかな死に顔だったよ」

「・・・そうか。父上は安らかな顔で死んだのだな」

咲月はよかった、と微笑んだ。

「では、行きましようか、咲月姫」

「よろしく頼むぞ、佐助」

オレ達は二人で笑った。

「佐助、その娘は？」

「ここの城主の娘の咲月姫ですよ」

「某は咲月という。・・・ところで、佐助、この者は誰だ？」

咲月の言葉に大將ははっはっはと豪快に笑った。咲月はきょんとして首を傾げた。

「僕は甲斐の虎、武田信玄じゃ。．．．ところで佐助、その者をどうするつもりじゃ？」

「．．．どうしましょうねえ」

連れてきてしまったものの、その後どうするのかということでは考えていなかった。．．．というか、考えなくなかった。

「佐助、某を攫ったからには最後まで責任をとれよ」

咲月はオレ様の腕の中でふふんと笑って腕を組んだ。．．．絶対自分の言った言葉の意味わかってないよこの人。それに楽しんでるでしょ絶対。オレ様がそんなことを考えていると、旦那が走ってきた。

「お館様！馬の準備が完了しましたぞ！．．．って佐助！？破廉恥な！！」

「．．．佐助、破廉恥とは何だ？」

オレ様の腕の中にいる咲月を見て旦那は叫んだ。そんなに叫ぶことだろうか？ただのお姫様抱っこでしように。そんな旦那を見て、咲月は耳を押さえてオレ様に尋ねた。

「そしてあの五月蠅い男は誰だ？」

「．．．五月蠅い男って．．．まあ、事実だけど」

「さ、佐助？！」

「幸村、自己紹介せい！」

「はい！お館様！」

大将の呼びかけで旦那は気を取り直したようだった。

「某は真田幸村」

「某は咲月という。咲く月と書いて咲月だ」

「咲月殿でござるか。ところで、咲月殿はなぜここに？」

「咲月はここの城主の一人娘だよ」

「なんと！」

旦那はそれを聞くとすごい勢いで頭を下げた。

「すまぬ！」

「？」

「咲月殿の父親を殺したのは某でござる」

「ああ、それ。別によい」

「別にいい？」

「父上は安らかに死んだのだろうか？ならば殺した相手を恨む通りはない。父上も今日死ぬであろう事はわかっていたようだしな」

咲月は苦笑した。そして、ふと気がついたというように付け加えた。

「それとも幸村が某を幸せにしてくれるのか？」

「さ、咲月殿を幸せに？！」

旦那は真つ赤になった。……一体何を想像したんだか。咲月はそんな旦那を見て可笑しそうに笑っていた。ホントさ、意味解って言ってる？

「冗談だ。某の身柄は佐助に任せたからな」

「だ、そうだ。どうするのだ？ 佐助」

「・・・と、いわれましても」

実は大将に任せてしまおうか思っていたのだが。咲月はこれでも城主の一人娘なのだし。

「某、あの場所からするのは初めてなのだ。佐助に見捨てられたらきつとのたれ死んで終わりだ。それでいいというのか？」

咲月は口をとがらせていった。確かに、あの場所に幽閉されて育ったというのなら生活能力は皆無だろう。そもそも、姫君に生活能力を求めるのは間違っている気もするが。

「・・・咲月はどうしたいとかあるの？」

「どうしたいといわれても困るな・・・そうだな、某はたくさんのことを知りたい。今まであの場所しか知らずに育ったからな。外のことを知ってみたいのだ」

まあ、この目を隠さねばならんかもしれぬが。咲月はそうやって金色の方の目を押さえた。そんな咲月を見て旦那が不思議そうに首を傾げた。

「なぜ目を隠す必要があるのだ？」

「某の目は右と左で違う。・・・あの場所からでたことがないのもこの目が不吉だから、だそうだ」

咲月はそういつてふつと笑った。旦那は頬を赤くして必死に言った。

「そんなことはないでござる！咲月殿の目は綺麗でござる！」

咲月はその言葉を聞いてきょとんとしていたが、今度は優しく微笑んでありがとう、と答えた。（旦那はそれまで以上に顔を真っ赤にした）

「ふむ、では儂の所で暮らすか？」

「信玄殿の所？」

咲月は首を傾げた。そして考えても意味がわからなかったのか、また反対方向に首を傾げた。

「咲月は身寄りがないのだろう？儂の義娘として儂の所で暮らさぬか？」

「・・・某、不吉な目だと「気にすることはない。咲月は可愛い娘だ」！か、可愛いらしい？」

大将の言葉に咲月は照れたように頬を赤くした。どうやら、そういうことは言われなれていないらしい。まあ、当然のことか。

「そうそう、咲月姫は可愛い女の子だよ」

「佐助まで！某をからかわないでくれ！」

「からかってなどいないぞ。儂も可愛い娘が欲しいと思っていたところだ」

「・・・世話になる・・・父上、と呼ばばいいのか？」

「父上、か。よい響きだな」

大将ははっはっはと笑って、お父様でもいいぞ、といった。

「お父様？」

咲月は首を傾げた。大將はまたはっはっはと笑った。

そんな感じで咲月は大将に引き取られて躑躅が崎館で暮らすようになった。

## 常夜の姫君 2

「・・・そういえば桃丸はどうしているんだろうなあ」

一緒に団子を食べていると、咲月殿は唐突に呟いた。

「桃丸？」

「従兄弟だ。某が幼いころ、父上が某の所に連れてきてな。それ以来度々一緒に遊んだのだ。数年ほど前にぱったり姿を見なくなったが、死んだという話は聞いていないから生きてはいるだろう」

「どんな子でござるか？」

「髪の毛が白くて長くて優しい少年だったよ」

白くて長い毛と聞いて、某はある人物を思い浮かべたが、優しい少年だったと聞いてその考えをうち消した。あの人物と優しいという言葉はどうにも結びつかない。

「名字は確か・・・明智？」

・・・明智光秀殿なのか。しかし、明智殿が優しい？何かの間違いではないのだろうか。いや、もしかしたら兄弟か何かのことなのかもしれない。

某がそんなことを考えていると、にわかには門の方が五月蠅くなってきたことに気がついた。

「何だろうな。行ってみようか、幸村」

「お供するでござる」

某達は二人で門の方に向かった。

「・・・桃丸？」

「朔夜、やはりここにいたのですか」

門の所には・・・明智光秀殿が来ていて咲月殿を見て目を輝かせた。

「桃丸、某の名は咲月になった。咲く月と書いて咲月だ。久しく名を呼ぶ者が無くて名を忘れてしまったのでな」

「そうですね。それではサクと呼びましょう。それに私の名も桃丸ではなく光秀になりましたよ」

「それでは光秀と呼ぶことにしよう。ところで光秀、これは何の騒ぎだ？」

「そ、そうでござる！これは何の騒ぎなのだ？！」

咲月殿と明智殿が和気藹々と話していたので思わずほうけてしまったが、そもそも明智殿は何故ここにいるのだろうか。

「月夜城が落ちたと聞いてサクがどうしているか見に行つたのですが、姿がなかったたので落とした相手である武田軍にサクのことを聞きに来たのですよ」

「そうか。しかし光秀、ずいぶん音沙汰がなかったのに某のことが気になったのか？」

「ええ、サクは私の大切な従兄弟ですからね。・・・あの城にいればサクは安全だと思っていたのですが」

「子細心配ない。某は信玄殿をお父様と呼ばせてもらっている。幸村と佐助という友もできたしな」

明智殿は咲月殿の言葉を聞いて少し悲しそうな顔をしたがすぐに元の表情に戻った。

「それではサクの新しいお父様に挨拶をしなければなりませんね。案内してくださいますか？」

「ああ、わかった」

「咲月殿?!」

「? 幸村、何か問題があるのか？」

咲月殿は首を傾げた。

「お父様、某の従兄弟の桃丸・・・じゃなかった、光秀だ」

「サクがお世話になっているそうですね、信玄公」

咲月殿はにこにことお館様に明智殿を紹介した。気のせいだろうか、お館様と明智殿が互いに殺気のような物を出している気がするのだが。

「・・・?」

二人がまったく何も言わないので不審に思ったのか咲月殿は首を傾げた。

「お父様、光秀、どうしたのだ？」

咲月殿が呼びかけると、二人はぎこちなく笑った。

「別にどうもしませんよ」「別にどうもしていない」

「そうか。・・・そういえば、光秀は某を見つけてどうしようと思っ  
っていたのだ？」

「叔父上が死んだのなら引き取るうかと思っていたのですが・・・  
一足遅かったようですね」

「某はお父様の娘になったからな」

咲月殿はににこと告げた。そして光秀はやっぱり優しいな、と  
付け加えた。言った本人と言われた本人以外は皆それを否定するだ  
ろう。どうやら、明智殿は咲月殿の前では猫をかぶるつもりである  
らしい。（もしかしたら桃丸だったころは本当に優しくったのかもし  
れぬが）

「あれ？何で明智の旦那がいるの？」

いきなりそんな声がして、佐助がお館様の前に降り立った。佐助  
を見て咲月殿は顔をほころばせた。

「佐助お帰り。光秀は某の従兄弟だ」

「咲月姫の従兄弟お？！それマジ？」

「うん。本当だ」

にににこと咲月殿は答えた。佐助は信じられない、という顔をし  
ている。・・・佐助、心中察するぞ。某も信じられぬ。

「佐助はお父様に報告するのか？じゃあ、某達は席を外した方がいいな。行こう、光秀」

咲月殿はそういうと、明智殿の手をひいて部屋を出た。

「・・・それでは、報告いたしますね」  
「・・・うむ」

お館様と佐助は呆然としていたようだったが、気を取り直して報告を始めた。某はそつと部屋を出て咲月殿と明智殿を追った。

某が二人を見つけた時、二人は並んで縁側に座って談笑していた。

「某、丁度桃丸はどうしているのかと思っていたところだったのだ」  
「そうですか、それでは丁度よかったですね」

「うむ、光秀が元気そうでよかった。そういえば、光秀は今誰かに仕えているのか？」

「ええ、私は信長公の元で働いていますよ」

「のぶながこう？」

「ええ、すばらしい人です」

「そうか、光秀がすばらしい人というなら一度会ってみたいな」

「それはダメでござるよ」

「?どうしてだ？」

某が口を挟むと、咲月殿は某の方を振り返って首を傾げた。

「織田信長はお館様の敵でござる。咲月殿は義理とはいえお館様の娘。簡単に敵に会いに行かせるわけには行かぬでござるよ」

「では、光秀は某達の敵なのか？もう会えぬのか？」

「大丈夫ですよ。ここに来る時は信長公の部下としてではなく、ただの明智光秀として来ますから」

悲しそつに言った咲月殿に、明智殿は優しそつな顔で言った。  
・  
・  
・  
本当に猫をかぶっているのだな。

「またな！」

「ええ、また会いに来ます」

某と佐助と咲月殿は門のところで明智殿を見送った。

「・・・できればもう来ないで欲しいね」

佐助のつぶやきは咲月殿には聞こえなかったようである。



## 常夜の姫君 2（後書き）

年齢に関する突っ込みはスルーの方向で。

### 常夜の姫君 3

「咲月殿、おいしいでござるか？」

「ああ、おいしい団子だ」

今では咲月と旦那はああして和氣藹々と団子を食べる仲になつて  
るけど、最初はこんなに仲良くなかつた。だって、咲月の旦那に対  
する第一印象は”五月蠅い男”だ。どう見ても好印象とは言えない  
（その後の綺麗な目だという発言で少しいい人だと思つたみたいだ  
けど）旦那の咲月に対する第一印象も”オレ様に抱えられてる女の  
子らしくない口調の女の子”だったみたいだし。最初の内は咲月が  
偶然であつて旦那に話しかけても旦那は赤くなつてまともに話をせ  
ずに大将の所に走つていつてしまつてたし。（「お館様！某をし  
かつてくだされ〜！」って）（・・・一体何を想像しちゃつてたん  
だか）二人が仲良くなつたきっかけは、何だつたつけ？・・・ああ、  
確かあの出来事がきっかけだつたつけ。

「佐助、某は幸村に何か嫌われるようなことをしてしまつたのだろ  
うか？」

「はい？」

オレ様が任務から帰って大将への報告をすませた時、咲月が話しかけてきた。

「幸村は某が話しかけると赤くなってお父様にしかってくださいと叫びながら走っていつてしまうのだ」

「・・・」

「あの時は普通に話をしていたのに、なぜ今は顔を合わせてもくれないのだろうか？」

咲月はうむう、と考えるようなそぶりをした。あの時、というのは咲月が初めて旦那と会った時のことだろう。確かにあの時は普通に会話をしていた。確かあの後、咲月は馬に乗れない（外に出たことが無いというのだから当然の話だが）という話になって、大将がそれならば旦那に乗せてもらえばいいとかつて・・・ああ、それが原因か。

「大丈夫だよ咲月姫」

「？」

「旦那は照れてるだけだから。ホントは咲月姫と仲良くしたいと思ってると思うよ」

「本当か？」

「ホントホント。だって、ほら」

オレ様は咲月の後ろを指さした。旦那がこちらの様子をうかがっていた。咲月が振り返ると、旦那は顔を赤くして隠れた。

「旦那、いつまでも隠れてるわけ？咲月姫が悲しむでしょうが」

「咲月殿が？し、しかし某は・・・」

「・・・幸村は某が嫌いか？」

「い、いや、そんなことは・・・ただ・・・」

「？ただ？」

「咲月殿を見ると、なぜか心臓の辺りがぎゅうと痛くなって」

「心臓が？幸村は病気なのか？！」

咲月はそれを聞いて焦ったように旦那に駆け寄り、胸元を掴んだ。

「大丈夫か幸村？！」

「さ、咲月殿？！」

旦那は顔を真っ赤にして気を失った。咲月にはもちろん旦那を支えられるほどの力はないので、一緒に倒れてしまう。

「佐助！助けてくれ！」

咲月はばたたと手足を動かした。倒れた時に旦那が咲月の上に乗る形になってしまったのだ。オレ様が旦那を持ち上げると咲月はふう、とため息をついて座り込んだ。

「大体わかったよ。旦那にはオレ様から言っておくから、咲月姫は気にしないでいいよ」

「・・・うむ。世話を掛けたな」

咲月が何か激しく勘違いをしてしまったような気がしないではないが、まずは旦那が先だ。オレ様はそう思って咲月を見送った。

旦那が目を覚ますのを待つて、オレ様は話を切りだした。

「旦那、咲月姫を見ると心臓が痛くなるって言ってたでしょう?」

「ああ。某は何か病気なのだろうか?」

「ええ、病気ですよ。しかも特効薬はないんだな、これが」

「何?! それでは、某は死ぬのか?」

「・・・まあ、場合によっては死ぬらしいですね。旦那、咲月姫を見た時心臓が痛くなる以外にもどきどきしたり、気がついたら咲月姫のこと考えちゃったりしてるでしょ」

「おお、その通りだ」

「それ、世間では恋煩いって言うんですよ」

「こ、恋?!」

「そう、恋。旦那も大人になったんだね」

「そ、某は恋など!」

「あ、咲月姫」

「何?!」

オレ様が後ろを指さすと、旦那はすごい勢いで振り返った。もちろん、咲月はいない。

「佐助!」

「ほら、やっぱり」

「・・・某は咲月殿に恋しておるのか」

「まあ、大体の人はそう思うでしょうね」

「咲月殿も?」

「咲月姫は思わないでしょうね。鈍感だし。旦那に嫌われてると思ってますよ」

「そ、某は咲月殿を嫌ってなどおらぬ!」

「はいはい、そういうことは本人にいつてくださいね、っと」

オレ様はそういうと旦那の背を押した。

「咲月姫、何か勘違いしてるみたいなんで誤解を解いてきてくださいよ」

「う、うむ、わかった」

旦那はそう答えて咲月を探しに行った。さてと、ここは後ろからこっそりみてやるとしますか。

「・・・大将も気になるんですか？」

「うむ、幸村に女心がわかるとは思えぬからな」

「あはは・・・」

「咲月殿！」

「あ、幸村。・・・幸村、無理しなくていい。某のこと嫌いなのだろっ？」

「そ、そんなことはござらぬ！そ、某は咲月殿のことを、すすす、好いて、おるのだ！」

・・・どもり過ぎだよ、旦那。顔を真っ赤にしていった旦那に、咲月はきょとんとしていたけど、旦那の言った言葉の意味を理解したのか、につこりと笑って答えた。

「某も幸村のことは好きだぞ。父上やお父様や佐助と同じくらいな」

「ほ、本当でござるか?! やりましたぞお館様!」

旦那は勝手に盛り上がってるけど・・・絶対「某も幸村のことは好きだぞ」までしか聞いてないな、あれは。

「・・・相変わらず声がでかいな、幸村は」

ぼそぼそと呟く咲月の声は旦那には聞こえてないみたいだ。

・・・結局、旦那のあの誤解は解けたのかな? オレ様、いくら相手が旦那でも渡すつもりはないんだけど。だって、連れてきたんだから最後まで責任を取らないと、ね。

常夜の姫君 4 (前書き)

ちよつと過去の話

## 常夜の姫君 4

「君が桃丸君かい？」

「はい」

「年はいくつだい？」

「10になりました」

「そうか。某の娘は今年4つになる」

「？幸助殿には子供はいないのでは・・・？」

「いや。一人だけ娘がいる。世に出ることのかなわぬ娘が・・・」

幸助殿はそういうと悲しそうな目をした。

「誰だ？父上か？」

「一姫、この子が昨日話した桃丸君だよ」

「そうか。そなたが桃丸か？某は朔夜よろしく」

「・・・よろしく」

射干玉の髪と闇夜と満月の瞳を持った姫は私を見て、にこりと笑った。

私が月夜城に預けられたことに特に意味はなかった。強いていえば、いつまでも人ならざる者たちと話をすることをやめない私を恐れた母親によって、彼女の妹の婿の所にしばし預けられることになったのだ。ただ、それだけのことだ。

『姫はキレイ。とってもキレイ。だから外には出られない』  
「どういうこと？」

『姫がキレイすぎるから、汚れた外の世界には耐えられない』

「・・・世界は、汚れているの？」

『汚い、汚い、汚れた世界。いつそ滅びてしまえばいい』

「え？」

それきり、その声はぶつりと止まり、私がいくら呼びかけても答えることはなかった。

「桃丸、どうしたのだ？」

「・・・ごめんなさい。少しぼうつとしてしまつて」

月夜城にいる間、私はそのほとんどを朔夜の元で過ごした。誰もそれを咎めることはしなかったし、朔夜は私を気味悪がらず、むし

ろ、私が来るのを喜んでくれているようだった。

「ねえ」

「何だ？」

「朔夜はここから出たいとは思わないの？」

「うーん・・・某は、ここだけで十分だ」

朔夜はそういつてにこりと笑った。私はその言葉が信じられなかった。

「?!何で?!」

「確かに、ここは広くないかもしれぬが、ここからは空が見える。父上が訪ねてきてくれる」

朔夜は窓から空を眺めながらそういい、一旦そこで言葉を切った。そして、私を見て微笑んで続けた。

「それに、桃丸も来てくれる」

「・・・私は、あなたが羨ましい」

「？」

「どうして、あなたはそんなにも笑っていられるのですか？」

世界に望まれなかったのはあなたも同じなのに・・・そう、付け加えることはかろうじて耐えた。だって、そんなのはただの八つ当たりだ。

朔夜は私の言葉を聞いて、きょとんとしていたが、ふっと笑って

答えた。

「某が幸せでない顔をすれば父上が心配する」

そういった朔夜の目には感情がなかった。顔は確かに笑っているのに、その目には一片の感情も含まれていなかった。立った4歳のはずの幼子は、ふさわしくない表情を浮かべて、それでも、確かに笑っていた。

「ここが、某の世界の全てなのだ」

そういつて朔夜は今までのように花が咲くように微笑んだ。

「そういう桃丸は幸せではないのか？」

「私は・・・」

あの家にいた時は、幸せだと感じたことはなかった。だけど、今は・・・

「私は幸せです。あなたに会えましたから」

## 銀の海、赤の月 1

何か面白いことが起こればいいとは思っていたが、こんな事を望んだ覚えはない。

はて。ボクは何をしていたんだっけ？

確かボクはたまには気分を変えようと思って筆記用具やらノートやらスケッチブックやら色鉛筆やらを鞆に入れて近くの丘に行ったはずだ。そして、あんまりにも天気がいいもんだったから鞆に道具とサングラスをしまつて眠った気がする。

さて。それじゃあ、ボクはなぜこんな所にいるんだろうね？

「hey, girl. who are you?」

「誰かって聞かれても、ボクはボクであつてボク以外の人間ではないはずだけどね」

ボクは突然声を掛けられて、思わず、それに答え、その方向を向いた。眼帯をした青年がボクをのぞき込んでいた。そして、ボクの目を見て、動きを止めた。

・・・ボクはサングラスを外したままではなかったか？

ボクはその事実が気がつくと、目をそらした。青年ははつとしたようにまた口を動かした。

「amazing・・・あんた、綺麗な目だな」(驚いたぜ)

ボクは青年の言葉を無視して鞆からサングラスを取り出してかけた。

「why are you cover it?」(何で隠すんだ?)

「すまないな、企業秘密だ。だがそうだな・・・ヒントを一つあげよう。邪眼、というものがある。見たものに何らかの作用をもたらす目のことだ」

「じゃあ、あんたはその邪眼の持ち主だと?」

「ボクの一族はみんなそうだ。まあ、皆同じ力を持っているわけではないのだけれどね」

「へえ、そりゃ面白いな」

「・・・ところで、君は誰だ?そして、ここはどこだ?」

「人に名前を聞く時はまず自分から、っていうだろ?」

青年はニヤリと笑っていった。ボクはそれもそうか、と思い、答えた。

「ボクは・・・ボクの名前は哀音。<sup>アイネ</sup>物書き志望の大学生だ。年は誕生日が来ていないからまだ18才」

「オレの名前は伊達政宗だ。年は19。奥州を治めている。ここはオレの居城の仙台城だ」

「伊達、政宗?」

「that's right」

「・・・」

ボクは頭を押さえた。伊達政宗だって?そんなの、400年以上は前の人じゃないか。ということは、ここは過去なのか?・・・頭痛がしてきた。

「どうした？」

「いや、ちょっと何が起こったんだか訳がわからなくて頭痛が」

「だいたい、あんたこそどこから来たんだ？虎のおっさんが天下統一してからもう一年だ。いまさらオレを暗殺しにきたわけじゃねえだろ？」

「ボクとしては大変不本意ながら自分の意志でここに来た覚えはない」

暗殺、か。まあ、やろうと思えばやれないこともないだろうけど、ボクは頼まれもしないのにそんな面倒なことはしない。だいたい、今武器は護身用のスタンガンしかないし。

「・・・つと、ちょっとまで？虎のおっさんって誰だ？」

「甲斐の武田信玄だよ」

「はあ?!」

武田信玄が天下統一したって？武田信玄は服部半蔵正成・・・二代目半蔵の配下の忍びによって暗殺されたのではなかったのか？いや、そもそもここが本当に過去の世界だったとしたら伊達政宗がこんなに流暢に英語を話すのはおかしい。ということは、ここは過去の世界というよりは異世界、ということだろうな。・・・面妖な。

「どうかしたのか？」

「ボクが知っている歴史では武田信玄は天下統一のための上洛の途中で暗殺されているんだ。・・・ボクの先祖の配下の忍びによってね」

「what?あんたの先祖って誰だ？」

「服部半蔵。ちなみに信玄暗殺は二代目の方ね。初代半蔵様はそのずっと前に死んでるから」

正確には、死んだことになっている、だけど。まあ、そんなことはどうでもいいのだ。一応、二代目が7つくらいのころに死に別れたって伝えられてるけど。

「・・・さつきから思ってたんだが、あんた、どこから来たんだ？」  
「君の話とボクの知識を総合して考えると、ボクはこことは違う、別の世界から来たという結論に至った」

ボクとしては大変不本意という他はないけどね。ボクがそう付け加えると、政宗は面白そうに笑った。

「It's very interesting」(そりゃ傑作だな)

「・・・さつきから君はなぜそんなに英語が流暢なんだ？下手な英語教師より上手い気がするのだが」

「It's business secret」(企業秘密だ)  
「・・・」

まねか？まねなのか？・・・まあ、どうでもいいことだからいいか。

「それよりあんた、行くあてはあるのか？」

「あると思うのか？」

「・・・思わない」

「まあ、そういうことだ。しかし・・・ここに来た原因がわからんことには帰ることもできんな。・・・また兄上に心配をかけてしま

う」  
はつきりいつてシスコン・ブラコンというにふさわしい人だ。今

は丁度海外公演で数ヶ月家を空けているから、兄上が帰ってくるまでに帰ることができれば多少・・・いや、ダメだ。兄上は少なくとも一日に一回は家族の誰かに電話をかけてくる。姉上達が兄上に心配をかけぬようにさりげなくごまかしてくれるかもしれないが、あまり長く家を空けると兄上が不審に思つて公演の途中で帰ってきてしまうかもしれないな。

「・・・早く帰らなければいけないな」

「どうした？」

「弟離れ、妹離れができていない兄上が仕事を放り出して帰ってきたら大変だと思つてな」

「・・・」

政宗は苦笑した。

「なあ哀音」

「何だ？政宗」

「行くあてがねえんなら、帰る方法が見つかるまでここにいたらどうだ？」

「なぜだ？」

「なぜつて・・・天下が統一されたとはいえ、世の中物騒だからな。行くあてもなく彷徨つてたらあんた、襲われるぞ」

「そういう話じゃない。・・・確かに、ここにおいてももらえれば助かるが・・・自分でいうのも何だが、こんな得体の知れない人間を簡単に招き入れていいのか？」

「あんた、オレに危害を加える気があるのか？」

「いや、無い」

まあ、依頼されればやるかもしれないが。だが、ボクも知人に危害を加えるのは好まないし、依頼されても断るかもしれないな。

「じゃあ、問題ねえよ」

「・・・世話になる」

そんなこんなでボクは政宗の城・・・仙台城にしばらく厄介になることになったのだった。

銀の海、赤の月 1（後書き）

ちなみに哀音は女の子です。

銀の海、赤の月 2（前書き）

SSを四つ。

## 銀の海、赤の月 2

<十三夜>

それは、ある月の綺麗な夜のこと。

「何だ？これは」

「見てわかんねえのか？杯だよ杯」

元親はボクに木でできた杯を渡すいつもの人好きのする笑みを浮かべた。

「それは解るが、これをボクにどうしろと？」

「それは、だな、あー、今からさ、月見酒をしようと思って、な。お前もどうか、と思って、な」

照れたように頭を掻きながら元親はいった。

「（・・・姫だ。）遠慮する」

「？なんでだ？てか今ぼそつと姫とかいったら」

「気のせいだ。なぜかといえば、ボクはお酒を飲まないからだ。未成年だしな」

「そんなこと気にすんなって。オレなんか15の時には飲んでたぞ」  
「知るかそんなこと。だいたい、ボクは酒は嫌いなんだ。酒が飲みたいのなら誰か別のやつを誘え」

「ちえ、わーったよ。酒なしでいいからオレと月見をしようぜ」

「・・・まあ、酒なしならつきあってやるよ」

<十五夜>

「哀音」

「?ああ、元就か。珍しいな、こんな時間に」

「・・・今日が何の日か知っているか？」

「?・・・知らないな。何の日だ？」

「今日は十五夜、月見の宴ぞ。・・・酒は出ぬが、そなたはその方がよからう?。」

「ああ、その方がいいな」

「・・・十三夜は長曾我部といたのだ、十五夜は我と過ごせ」

「?ああ、わかった」

それは、綺麗な満月の夜でした。

<予知夢>

「いいかい?ボクにいわせると、予知夢は必ず当たるものなんだよ」

「なぜでござるか？哀音殿」

「そりゃあ、当たらなければ予知夢と呼ばれることもなく、ただの夢で終わるからさ」

「なるほど・・・」

「それはちよつと強引じゃないかい？」

せつかく幸村が納得しかけたところを、慶次が話に割り込んできた。ボクはほんの少し、むっとしながらも自説を続けた。

「だが、予知夢と言うやつは大抵、物事が終わってから”ああ、そういうえばこんな夢見たな”と思うのが常だろう？」

「・・・そうだっけ？」「某は見たことがござらぬ故」

幸村、夢も見ないでぐっすり寝てそうだもんな。てか、夢の中でも団子食べてそう。

「考えてもみたまえ、目が覚めた時、夢で見たことを毎回、全て覚えてるわけではないんだ。例え、それが予知夢であろうがなかろうが、忘れる時は忘れるし、覚えている時は覚えている。そうだろう？」

「某はあまり見た夢を覚えておらぬな」

「オレは結構覚えてるぜ」

「人間の頭の中がどうなってるのなんて解ったこつちや無いんだ。何が起こったって不思議じゃないと僕は思うよ。・・・？そういうば、何の話をしていたんだっただけ？」

「・・・忘れたでござる」

「あはは・・・」

<色眼鏡>

「hey、さっきから何描いてるんだ？」

「暇つぶしに仕事をする政宗でも描いてみようかと思ってね」

「へえ、見せてみるよ・・・HA、まあまあじゃねえか。だが・・・オレはこんな顔か？」

「ボクには君がこのように見えるということだよ。実際の君がどうだかは解らないがね」

「what？」

「ボクはサングラスをかけているだろう？」

「ああ、なるほどな」

色眼鏡で見る：先入観を持って物事を見ること

朧月夜 1（前書き）

何処までも一方通行な恋

## 朧月夜 1

「ほこりたかききしん、ここにいたのですか」

「・・・いい加減そのこっばずかしい呼び名はやめてくれませんか？軍神殿」

僕が嫌そうな顔をしてそういうと、軍神はふふふ、と薄く笑みを浮かべた。

「ふふ、それならばあなたも、わたくしのことを”ぐんしん”とよばず、けんしんとよんでください」

「ボクが人の名前を呼ぶと差し障りがあると前話したでしょうに。はあ。それで？ボクに何か用でもあるんですか？」

僕が呆れたように言うと、軍神は平然として答えた。

「いえ、ただしばらくすがたをみていなかったなので、しんぱいしていたのですよ」

「ああ、そういえば昨日まではるひちゃん追いかけて北条まで行っていたんですよ、ヒマだったから」

僕がそういうと、軍神は驚いた顔をした。

「なんと・・・わたくしのつるぎをおいかけていつていたのですか？」

「いいませんでしたっけ？ボクは元忍って。こっちの人もそう呼んでいるのかは知りませんが、昔は伝説の忍と呼ばれていたんです

よ」

「それはすばらしいですね。しかし、あなたのなまえをきいたことありませんが。へいこうせかいなのでしょう？」

「そりゃ、月龍というのは忍をやめてから名乗っている名ですしね」

僕がやれやれ、と首をすくめて言うと、軍神はわずかに眼を細めた。

「では、しのびであったときのなは？」

「・・・服部半蔵、そう名乗ってましたよ」

「はつとりはんぞう、というと、とくがわの？」

「昔の話ですが」

僕がちよつと迷った後、答えると、軍神は驚いた、と納得した、の中間のような顔をした。しかし、その後僕を見て疑っている顔をする。

「・・・あなたはげんぶくしたてのこどものようにしかみえないのですが」

「ちよつとへまをしてね。呪いをかけられちゃったんですよ。それが変な風に作用して、こうして若返っちゃってるんですよ。まあ、その時に忍をやめたんですがね。ああ、ちなみに竹ちゃんに平ちゃんと一緒に仕えているのはボクの息子で二代目の半蔵ですよ。忍術より槍術のほうに向いているようだったのでそっちに進むようにいましたけど」

「むすこまでいたのですか・・・ほんとうにふしぎなおかたですね」

軍神は納得した顔をした。もしかしたら信じていないのかも知れないが、本当のことなのだから、仕方がない。

「・・・ところで、さつきから何でボクははるひちゃんに殺氣を向けられているのかな？」

「お前、徳川の手のものだったのか！」

「そりゃ、ボクは元徳川配下の忍で竹ちゃん達の成長を温かく見守ったりもしたけど、今は全然関係ないし、むしろ死んだことになっているから正体ばれたら追われるし、てかそもそもこの世界の間人じゃないからここの徳川とは何の関係もないんだけど」

「信用できんな」

「そんなことをいわれても」

はるひちゃんに怒ったような目で見られたので、僕は肩をすくめた。軍神がそれに口を挟む。

「・・・とくがわのしゅじゅうがどんなかかっていますか？」

「徳川の主従っていうと・・・竹ちゃんとハチ？えっとね、竹ちゃんは長身長髪の腹黒美青年で、ハチは髪の毛ぱつつんでむすつとした顔の純情少年」

僕が僕の知る徳川主従を思いだして言うと、二人はぼかんとした顔をした。

「・・・誰だそれは」

「ボクの知る徳川の主従。ちなみにもっともボクの正体がばれたらやばい人達」

「・・・」

僕が虚無的な笑顔を交えてそう告げると、二人は無言で顔を見合わせた。



朧月夜 1（後書き）

銀の海、赤の月と同世界だったりします。

雨宿り（前書き）

現代パラレル（大学生）

## 雨宿り

「ん？」

「どうしたのだ？桜花」

「今なんかぼつって・・・」

桜花はそう呟くと空を見上げた。曇った、灰色の空だ。

「何か雨降りそう・・・。桜、傘持っていないんだけど」

「某も持つておらぬ・・・。ぬ、降り始めたな」

「うひゃ、桜濡れるの嫌いなんだけど。幸村、雨宿りしよう！」

桜花はそういうと近くにあった喫茶店を指さして走りだした。幸村もそれに続く。

カラン カラン カラン・・・

喫茶店の中は幾分古めかしかったけれども、ゆったりとした曲が流されていたりして居心地の良さそうところだった。桜花は鞆からタオルを出して頭を拭きつつ、店の中を見回した。桜花と幸村以外には、店主らしき頬傷の男とカウンター席に座って男と話をしている眼帯の青年、隅の方の席で静かに一人で読書をしている青年しかいない。

「む？政宗殿ではござらぬか」

「真田幸村じゃねえか。奇遇だな」

「幸村、あの人知り合い？」

「うむ。政宗殿は某の中学生時代からの好敵手、所謂”らいばる”でござる」

「幸村、そのcuteなgirlは誰だ？オレにも紹介しろよ」

「ああ、この方は桜花殿と言って某のこ、こ「幸村の恋人の桜花です。よろしく、政宗くん」

「hu」幸村にloverができるなんてな。I・m surprised」

政宗はニヤリと笑った。

「幸村も大学生になったんだし、やることやってんのか？」

「ぶはっ、や、やること？は、破廉恥でござる！」

政宗の発言に、幸村はふいた。

「Ah、やってねえのか。つまんねえ」

「政宗くん、真っ昼間からそういうこというの、やめてよ。幸村もいちいちそんなことでそんなに動揺しないの。中学生じゃあるまいし」

「HA。幸村だっと思っていたこと、何回かあるだろ？」

「もちろん、その通り・・・って破廉恥でござる！」

その時、がたと音がした。

「黙って聞いておれば・・・桜花、それ以上その男（政宗）に近づくな。孕まされるぞ」

「あ、兄さん」

「「兄さん?!」」

「幸村、紹介するね。桜の双子の兄の元就」

「妹が世話になったようだな」

「ふ、双子でござるか？」

「・・・全然似てねえ・・・」

「政宗、桜花に妙なことを吹き込むな」

「妙なことってなんだ？」

「・・・焼けこげよ！」

「おっと、危ねえじゃねえか」

「ち、外したか」

そんな二人のやり取りを呆然と眺めていた幸村は呟いた。

「・・・なぜ元就殿はあんなに機嫌が悪いのだ？」

「兄さん、雨が降ると日輪が拝めないし、機嫌が悪くなるのよ」

「そ、そうでござるか」

「うん、そう」

## 氷姫 1

「兄上、兄上」

私が呼びかけると、兄上は筆を止め、私に振り返った。

「・・・雪か。我に何か用か？」

「長曾我部「追い返せ」え？」

「我はあやつに会うつつもりはない」

兄上はそういうと再び筆を動かし始めた。・・・兄上がこのような反応をするのはある程度予測はできていたけれど。

「でも、せつかく四国から来てくださったのに」

「傾国のバカに氣遣いなど無用だ」

兄上は苛々とした口調でそう吐き捨てる。兄上は今はそんなことはどうでもいい、とでもいうように書き終わった書類を横にどかし、また別の紙に手を伸ばした。

「えらいいいようだな、元就」

やれやれ。そんなつぶやきが聞こえて来そうな声が後ろから届いた。私は振り返って、その声の主を見た。（兄上はまったく無視をしたようだったけれど）

「あ、元親さん。あちらで待っていてくださいと申し上げたのに」

「わりいな。待ちくたびれちまってよ」

それにどうせ元就は自分から来ないに決まってると思ったしな。  
元親さんはそういつて人好きのする笑みを浮かべた。

「ふん。仮にも国を治める身ならば、ほいほい出歩くものではないわ」

「ははは・・・」

相変わらず筆を止めずに話している兄上に、元親さんは苦笑した。

「そういえば、元親さんは兄上に何のようで来られたのですか？珍しくまともな方法で来られたようでしたけど」

いつもは碇槍で飛び込んできたり、船の砲台から撃ち出されて飛び込んできたり、などとほとんど毎回城を壊しながら入ってきては兄上のこめかみをひくつかせていたのだけれど。今回はちゃんと歩いて門から入ってきたようで。

「あ？ああ、そうだ、忘れるところだった。元就、雪菜をオレに「焼けこげよ！」いでっ、ひでえじゃねえか、元就」

「ふん。お前などに雪はやらん。諦める」

「え？え？え？？？元親さんの用事って・・・」

「おうよ。正式に雪菜を正室にもらうために「やらん」とっておるうが「くはっ」

再び兄上に攻撃を食らって、元親さんは今度は床に突っ伏した。

「・・・兄上、やりすぎでは・・・」

「問題ない。このバカはこれくらいのことでは死なん。バカだから

な」

「・・・」

兄上はバカを強調した。確かに兄上からしたら元親さんはバカなのかもしれないけど。一応幼なじみなんだし、もう少し優しくしてあげたらどうなのかなあ。今回は珍しくちゃんと門から入ってきたんだし。私はそんなことを考えつつ、元親さんを介抱するべきか考えていると、元親さんはむくりと起きあがった。

「だがよう、元就」

兄上はまた書類の処理に戻っていた。それでも元親さんの呼びかけに、ちらりとそちらを見る。元親さんの口調に何か、真剣なものを感じたのだろう。

「妹が大事なのは解るが、このままじゃ行き遅れちまうぞ。もう、雪菜も16だろう？」

元親さんのいうことももつともだ。今の時代、女は12、3才で嫁いでもおかしくない。16といったら、もうとくに嫁いでいたとしてもおかしくないくらいだ。・・・もつとも、それをいったら22で正室がいない元親さんも異例中の異例なのだけれど。

「・・・だからといってなぜお前に雪菜を嫁がせなければならん」

「じゃあ、誰に嫁がせるつもりなんだ？」

元親さんの真剣な声に、兄上は動きを止めた。しかし、それも一瞬のことで、また何事もなかったかのように筆を動かし続ける。

「なぜお前にいう必要がある？」

「・・・大切な幼なじみの行き先は気になるだろう」

それは小さな声だったけれど。確かに私と兄上の耳に届いた。元親さんが本当に私のことを大切に思ってくれていて、心配してくれていることも。

「・・・元親さん」

「？」

さっきまでずっと黙っていた（というか、話に加われなかった）私が声をかけたことに驚いたのか、元親さんは少し間抜けな顔をして私を見た。

「私なら大丈夫です。それに、」

私はそこで一旦言葉を切った。口にするべきか迷ったからだ。けれど、やはり、いうことにした。

「私は兄上よりすばらしいと思える人にしか嫁ぎません」

「・・・それは暗にオレは元就より劣っているっていつてるのか？」

「いえ、元親さんがすばらしい人だということは知っています。ですが・・・」

「ですが？」

「元親さんはいつも城を壊して入って来るでしょう？」

私がそついうと、元親さんは苦笑した。



### 銀の海、赤の月 3

「君はこんな問いを聞いたことがあるかい？」

鉄の戸を閉めたまま籠城を決め込んだ彼は返事を返さないが、そんなことはどうでもいい。ボクはそのまま言葉を続ける。

「ここにものすごく丈夫でどんなものでも壊せないほど頑丈な扉でふさがれた部屋がある。鍵がかかっていて、開けることはできない。あるのは強力な爆弾がいくつか。ただし、それでもその扉を壊すことはできない。さて、どうやって部屋の中に入る？」

彼はそれでも返事を返さない。ボクはため息を一つつくと、「答え」を実行した。

「頑丈な扉ではなく、横の壁の部分を壊す」これが答えだ。おわかりいただけたかな？」

ボクの答えと共に壁に穴が開き、扉の前に座り込んでいた彼の姿が見える。その目は驚きに染められている。

「……だからといって実行することはないだろ」

「何度も呼びかけたのに答えずに無視を決め込む君が悪い。」

ボクがいうと、彼はいつもの皮肉げな笑みを浮かべた。

「Sorry・心配させたのか？」

「小十郎さんがな。政宗、君は仮にも城主だろう？少しは真面目に仕事をしたらどうだ？」

ボクは壁の穴から中にはいると、いまだに座り込んでいる政宗の前にしゃがみ込んだ。

「泣き言があるならボクが聞いてやるぞ。慰めはしないがな」

「HA、オレが泣き言を言うത്？」

「そうでなければ君はこんな所に籠もった？ただサボるだけなら屋根の上でも城下でも愛姫の所でも他に行くところがあるだろう？」

「・・・オレと愛が折り合いが悪いのは知ってるだろ」

「ああ。少々以外だったがな。・・・愛姫と猫御前しか室がないのも」

何しろかなり派手に遊んでいて側室も側小姓も一夜の相手も沢山いたと聞いていたからな。ボクがそう付け加えると、政宗は不機嫌そうな顔をした。

「何、男がそういうことを好むのは当然のことだ。恥じることはない」

「お前が言うな。そしてもっと慎みをもて。女がそういうことをいうな」

「すまん。元からこんな性格だし、これを変えるつもりはない。・・・さて」

ボクは両手で政宗の顔を包んだ。

「君はなぜ一人で泣くんだ？」

「HA？オレは泣いてなんか泣いているだろう。気がついていな

いのか？」

ボクは政宗を抱きしめた。位置的に胸に政宗の顔が埋まる感じになつて慌てているような気がするがそれは無視する。

「だから泣き言を聞いてやる、と言つたのだ。まあ、愚痴でもいいが」

そのままよしよしと背中を撫でてやっていると、やや激しい動きで政宗に背中を叩かれた。ボクが腕をゆるめると、政宗はがばつと効果音が出そうな感じに顔を上げ、僕から離れた。

「おや？不快だったか？」

「いや、ものすごくきもちよか・・・って、違う。危つくあの世に行くかと思つたぞオレは」

「そうか。それはすまなかつたな」

平然と返したボクを政宗は半目で睨む。

「あんた、絶対悪いと思つていないだろう」

「悪いことをした覚えはないからな」

強いていえば、力の加減を間違つたかな？ボクがそう付け加えると、政宗はダメだこりゃ、みたいな顔をした。

「・・・元氣は出たか？」

ボクが微笑んで言つてやると、政宗はびっくりした顔でボクを見た後、さっと目をそらした。そして何事か小声で呟いた。

「何だ？」

「thank you. I got well a little」  
e」（ありがとう、・・・少し元気になった）

「そうか。それはよかった。ついでに、できたら何で落ち込んでいたのかも教えてくれると嬉しいのだが」

「・・・何でそんなに楽しそうなんだ？」

「面白そうだから決まっているだろう」

「・・・」

## 朧月夜 2（前書き）

三人よれば文殊の知恵？

\* 今更ですが、精神的な意味でB L注意。艶表現はありません。

## 朧月夜 2

「・・・なぜお前達はここにいるのだ？」

「そりゃ、オレ様も任務だし？」

「いや、ヒマだったからにはるひちゃんについてきてみただけだけど」

平然と答える月龍にかすがは頭を抱えた。

「猿のことはとりあえずおいておくとして」

「オレ様はおいておかれちゃうの？」

「五月蠅い、黙れ！」

「はいはい」

「月龍、何でここにいるんだ？お前は謙信様と一緒にいるはずじゃあ・・・」

「だからいったでしょ。ヒマだったからにはるひちゃんについてきたって」

「しかし、ここに来るまでお前の気配は・・・」

ちつつち。月龍は指を振った。

「ボクを誰だと思っているの？ボクはこれでも元忍。気配を消すのくらい朝飯前、だよ」

そういつてににこと笑う月龍を二人はあきれた顔で見ていた。

「・・・その年で元忍って、一体どういう事？」

「この姿は本来の姿じゃないの（ま、元の姿でも見た目通りの年齢

じゃないけど）・・・幸い今日は満月だ。って、何で満月なのに忍び込もうとするかね、お二人サン。そういうのは普通朔月の日から月齢の浅い日でしょうが。・・・まあ、いいか。ボクの本来、見せてあげるよ」

月龍はそういうと小さい声で呪を唱えた。一瞬眩しい光が放たれ、さつきまで月龍が立っていたところには、20歳前後と思われる青年が立っていた。

「っ、お前は・・・」

「あ、はるひちゃんはこの姿見たことあったっけ？」

「前の朔月の夜・・・」

「そうだよ。ああ、そういえば、君、誰だっけ？ボクは月龍。軍神殿のところにお世話になってます」

月龍はそういつて敬礼のようなポーズをして佐助に笑いかけた。佐助はそれまでの展開についていけていなかったのか呆けた顔をしていたが、月龍の言葉にはっと、気を持ち直し、いつものような笑みを浮かべた。

「オレ様は人呼んで猿飛佐助。以後お見知り置きを、ってね」

「猿飛・・・へえ、ここのさっちゃんも男前の人間なんだ。ってか、老けてる？」

「は？」

「いやいや、ボクの知ってるさっちゃんはユッキーちゃんとその年がかわらないから、軍神とハルちゃんが元気な時は生まれてるか微妙だったんだけど」

「・・・月龍、”ユッキーちゃん”とは真田幸村のことか？」

「ん、幸村こと信繁君だよ」

「旦那のこと知ってるの？」

「あつちのユツキーちゃんならね。ここのユツキーちゃんと同じ人かは解らないけど・・・たぶん、違うだろうなあ。軍神殿もけんちやんと違う人だったし。ここのゆきちゃんはどうな人なの？」

うんうん、と頷きながらいい、月龍はかすがを見た。

「暑苦しい男だ」

「暑苦しい・・・微妙だな。ボクの知ってるユツキーちゃんは戦場では暑苦しい・・・じゃなかった、熱血だけど、普段は温厚で大人しい子だったから」

「温厚で大人しい？旦那が？」

「お兄ちゃんのノブちゃんに”物静かで怒らない”と断言されてたよ・・・その反応からすると、やっぱり別人みたいだね」

月龍はしみじみとそういった。

「それに、ハルちゃんに仕えてたのはいたずら腹黒外面は紳士のマサの方だったと思ったんだけどなあ」

平行世界って、面白いなあ。月龍は呟いた。

「・・・一体、どういうこと？」

「それはですねえ、とびちゃん。ボクはこことは違う世界から来たんですよ。元の世界には恋人もいるんで、さっさと帰りたいんですけどね」

「・・・恋人ってちっちゃい女の子？」

「ボクはちっちゃい女の子に欲情するような趣味はないよ。けいちやん人外だし。性別でいえば男だし。年齢は・・・ボクよりちょっと上か下か・・・どっちだっけかなあ」

「人外って・・・何？」

「風の精霊さんですよ。姿はほとんど人と同じ。で、ヒデの盟友であり、傾奇者のとっしーの甥っ子。ん？と、いうことはきつと年下だな」

「誰だかよくわかんないけど・・・こっちにもいるの？」

「別人の人間ならいそうな感じだね。ちよつと探った時にちらりと名前を耳にしたし・・・さて？無駄話はこれくらいにして、お仕事をしませんか？お二人さん」

月龍がそういつて軽く殺気をだした。はつとしたように二人は武器に手をやり、後ろを見る。

「油売つてたから敵さんに見つかっちゃったのかな？」

無言で飛びかかってきた忍者軍団を見て、月龍は目を細めた。口の前に指をやり、小声で何事か呟く。風に乗って流れてきた声に佐助は耳を澄ました。

「兵に臨みて闘う者、皆陣列前みて行く。憎しと思えば七五三、六一八は皆同じ。臆に満ちた鬼の力、我が意に添いて力を現せ。」風刃”」

月龍が最後の一言を呟いた時、忍者軍団が一瞬の内に何かにずたずたに切り裂かれた。佐助とかすが驚いてそれを見てみると、月龍がくすくすと笑った。

「敵の力量も解らずに考え無しにつつこんでくるからそうなるんだよ・・・うん？やりすぎたかな？」

「・・・一体、何をしたんだ？」

「ちよこつと言霊をね」

「言霊つてさっきの訳わかんない呪文？」

「訳わかんない、て・・・まあ、半分ぐらいノリと適当だけどね。短くしようと思えば、一言でもいいんだけど、それだと命中率とか下がってはるひちゃん達に当たりそうだったから」  
「ノリと適当って・・・」

佐助があきれた顔で見ると、月龍は少しむつとした顔で答えた。

「あのね、意味のある言葉だけで言霊使ったら相手に力ある言霊が解っちゃうでしょ？一応秘伝だから簡単に相手に知られちゃダメなの。それに、余計な言葉をいれとかないと、たぶん今回の場合なら、そうだな・・・そいつら細切れだね」

「・・・」

「さて、見つかったやつたみたいだし？お仕事の続きと行きませんか？お二人さん」

月龍がいたずらっぽく笑った。

## 銀の海、赤の月 4

「こういう話を知っているか？」

哀音は唐突に、そしていつものように、こう切りだした。

「ある人に目隠しをして、機関車の線路・・・まあ、爆走する荷車の通り道、とでも思っておけばいい、の所に転がして、これから200数えたら機関車がやってくると言って、まあ、200数えた後に機関車が来るのは本当何だが、それは隣の線路だったとしてもその人は死んでしまうそうだ」

「どういうことだ？」

「恐怖とはそれだけ人の体を動かすものだということさ。ああ、ちなみに機関車にひかれたら五体が引きちぎられるような感じで死ぬから」

とても楽しそうにそういう哀音を見て、オレは顔をしかめた。

「・・・いったい、あんたはそういう知識をどこで得てきたんだ？」

「この話は姉さんから聞いた話だが前回の話は兄貴から聞いた」

前回の話、というのは頑丈な扉がどうのこうのという話のことだろう。

「・・・あんたには何人兄弟がいるんだ？つてか、”兄上”つてのと”兄貴”つてのは別人のことか？」

「ボクには兄上が一人、兄貴が一人、姉さんが一人、姉貴が一人い

る」

哀音はそういって笑った。

「・・・つまり・・・」

「兄が二人、姉が二人いるのさ。皆成人しているが、家を出てはいない。まあ、兄上は大抵色々なところを回って仕事をしているのであまり家にいないがね」

「あんたの”兄上”ってのは何の仕事をしてるんだ？」

「兄上の仕事？表向きはピアニスト兼ヴァイオリニスト」

「？」

「要するに楽師というやつさ」

「楽師、ねえ・・・」

一度、哀音が不思議な楽器を吹いているのを見かけたが、あまり上手くなかった。(・・・まあ、知らない曲だったが)

「兄上はすばらしい音楽家だよ・・・ボクと違ってね。ボクは歌うのは好きだけど演奏するのは苦手なんだ」

オレが何を考えているのか解ったのか、哀音は口をとがらせてそういった。

籠の小鳥（前書き）

黒い幸村

## 籠の小鳥

「幸村さん」

一葉殿はいつもの笑顔でオレに笑いかけた。

「おお、一葉殿。どうしたでござるか？」

「見てください。小犬が生まれたので、もらったんです」

「……とっても、可愛らしいでござるな」

にこにこ腕に抱いた小犬に笑いかける一葉殿を見て、オレの胸は軋んだ音を立てた。嗚呼、苛々する。

「……幸村さん？」

「！あ、いや、何でもないでござるよ」

「今日の幸村さん、何か変です。どうしたんですか？」

一葉殿はオレの異変を感じ取ったのか、心配そうな顔をした。だが、オレの见たいのはそんな不安そうな顔ではない。オレが見たいのは一葉殿の笑顔だ。オレはいつもの笑顔を取り繕う。

「そうでござるか？」

「ほらまた。私でよければ、話を聞きますよ？」

一葉殿はオレの眉間を指さして苦笑いした。そこに何かあるのだからか？

「本当に、何でもないのでござるよ。ところで一葉殿、犬の名前は決めたのでござるか？」

「いいえ。まだ考え中です。・・・幸村さん、ゲンとコウとユキだったらどれがいいと思います？」

「一葉殿、それは・・・」

オレの名前からとっているのだろうか？

「やっぱり、ユキかなあ。あ、佐助さんはどう思いますか？」

「それでいいんじゃない？旦那もきつと喜ぶし」

「？そうですか？じゃあ、この子の名前は、たった今からユキです。・・・あ、ユキ、どこに行くの？」

一葉殿の腕から小犬・・・ユキが飛び降りた。そのままどこぞへと走り去ってしまう。一葉殿はユキを追いかけて走っていった。

「・・・佐助」

「何ですか？旦那」

「某は、狂っているのだろうか？」

「は？」

「・・・オレは一葉殿を閉じこめて誰にも会わせず、オレだけを見ていて欲しいと思うのだ。オレは、狂っているのだろうか？」

一葉殿にはオレだけを見て笑っていて欲しいと、思ってしまうのだ。

「・・・旦那がどこからか一葉ちゃんを連れて帰ってきた時、オレ様、正直すつごく驚いた。あのちよつとしたことで破廉恥って叫んでた旦那が女の子を連れて帰ってくるなんて何があっただろう？つて。・・・本当、何があっただんです？旦那」

「・・・最初は天女だと思ったのだ」

「天女？」

「うむ。一葉殿は見たことのない服装をして、見たことのないからくりを手に持って丘に立っていたのだ。そして、オレを見て微笑んだのだ”助かった”と」

そして、オレは、その笑顔に魅了された。

「一葉殿は気がついたらそこに立っていて、家へ帰る方法が解らないといっていた。だからオレは一葉殿を連れ帰ったのだ」

「・・・旦那、今ものすごく論理の飛躍があつた気がするんだけど」  
「気のせいだ」

「・・・なるほど。それが本当だとすると、一葉ちゃんは一体どこから来たんだろうね」

「さあな」

「だが、そんなことはどうでもいい。オレはもう一葉殿を手放す気はござらぬからな」

オレはそういつて槍に巻き付けた布を思い出していた。一葉殿の髪を結んでいた白く細い布。天女は羽衣を奪われれば天へと帰ることができなくなるといふ。一葉殿の”羽衣”は何だろうか。いつそ、それを奪ってしまいたい。

そうすれば、一葉殿はずっとオレの所にいてくれるだろうから。



## 水月 1

「今日は、髪の毛を洗わなきゃな」

ふんふんふん♪少女は鼻歌交じりに服を脱ぎ捨てると、風呂場に入った。体を流し、髪の毛を洗う前に一旦体を温めようと浴槽に気がついた時、彼女はそれに気がついた。

「・・・なんでこいつ、服のまんま風呂に入ってるんだ？」

浴槽の中には青い鎧の青年が目を閉じて転がっていた。

「おい、大丈夫か？」

政宗が目を覚まして一番最初に目に飛び込んできたのは、端整な顔立ちをした少女の顔と、その豊満な胸だった。

「・・・wow, It's great・・・」

「・・・そんな軽口を吐く元気があるなら大丈夫だな。・・・頼む、こいつの身なりを整えてやってくれ」

「「「解りました、お嬢様」」」

少女がそういうと、メイドさんが現れて政宗を連行していった。

政宗はあれよ、あれよと言う間に濡れた服を脱がされ、（発見時、風呂の中に沈んでいたため）風呂に入れられ、服を着せられた。そして、今政宗はソファに座って待っている。

「！お嬢様がお呼びですわ！」

ぽーん、と言う音がしてメイドさんが持っている機械のモニターに少女の顔が映し出される。

『ごめん、何か、もう一人いたみたい』

少女はそういつて腕に抱えた男を示した。何の気なしにそれを見ていた政宗は驚いた。

「！小十郎？！」

『あ、あんたの知り合い？丁度いいや。この人もまとめて後で話聞かせてよ』

少女は政宗の声を聞きつけて呼びかけた。二人がそう話している間に、別のメイドが少女の元に到着し、小十郎を回収していった。

「・・・さっきから思ってたんだが、隠さなくて良いのか？」

『何をだ？』

「A h . . . 胸とか」

少女は見事なまでに真っ裸で、どこも隠そうとはしていない。そして、不敵に笑って答えた。

『そう気にするほどのことではあるまい？』  
「. . . .」

政宗だって年頃の男の子なので女の子の胸を見たら破廉恥なことを考えたりするのだが。

『まあ、いいや。お風呂からでたら話聞くから、それまでに考えまとめといてよ』

少女はそういつと通信をきった。

「h e y 小十郎、大丈夫か？」

「. . . 政宗様？ご無事でしたか？！」

「見ての通りだ。オレはぴんぴんしてるぜ」

「. . . それを聞いて、この小十郎、安心しました」

政宗と同じく服を着替えさせられた小十郎は、おそろおそろソファの政宗の隣に座った。

「小十郎、何があつたか覚えてるか？」

「・・・確か、合戦中に雨が降ってきて・・・」

「ああ、そこまではオレも覚えてる。だが・・・あの後何が起こった？」

「・・・」

二人が話していると、誰かが部屋に入ってきた。二人がその方向に目を向けると、その人物は首を傾げた。

「・・・」

その人物——肩ほどの黒い髪を持ち、和服を着た長身の男だ——はつかつかと政宗と小十郎に歩み寄り、じつと二人を見た。三人が何も言わずに見つめ合って（にらみ合って？）いると、扉の方から声がした。

「む？父上もいたのか。まあ、いい。おい、青年、何で家の浴槽の中で服着たまんま寝てたのか解りやすく説明してくれないか？」

少女はがしがしとタオルで自らの腰の辺りまである長い黒髪を拭きながら聞いた。ちなみに服装は簡素な水色の浴衣である。

「その前に、一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「ここ、どこだ？オレ達は戦の途中だったはずなんだが」

「は？戦？」

少女は訳がわからない、と言うように首を傾げた後、まあいいや、と呟いた。

「ここはボクの家だ。ボクは火狩桜花。この家の次女だ。その何

「もしやべらない男はボクの父上の火狩無月。で？君たちは誰だ？」

「オレは奥州筆頭、伊達政宗。で、こっちの男はオレの部下の片倉小十郎」

政宗の答えに、桜花はまた首を傾げた。

「伊達政宗に、片倉小十郎？なんだか、お侍さんみたいな名前だな・  
・いや、でもさつきは鎧着てたし・・ああ、でも、英語使ってたしな・・」

「侍みたい、じゃなくてオレは侍だ。you see？」

「oh - I see : : : じゃ、なくて。本当に、君たちはどこから来たんだ？」

桜花はやれやれと頭を抱えた。ちなみに、まだ髪の毛を拭いている。

「・・・まさか、過去から来ました、ってオチじゃなからうな？・

・今からいくつか質問をするから、素直にそれに答えてくれ」

「おい、てめえ、さつきから政宗様になんて口の利き方しやがる」

「落ち着けよ小十郎。オレは気にしちやいねえ」

怒り出した小十郎を政宗がなだめる。それを見て、無月はふい、とどこかへ行つた。

「？父上、飽きたのかな？・・・まあ、いいや。質問その一。君の同世代の武將は誰がいる？」

「同世代・・・？Ah - 真田幸村と、確か、徳川家康と、オレより少し年上だが、長曾我部元親と毛利元就、それに浅井夫婦に前田慶次つてとこか？」

「は？毛利元就と伊達政宗がほぼ同年代？」

桜花はまた首を傾げた。政宗も怪訝な顔をする。

「何かおかしいか？」

「ボクが聞いた話じゃ、毛利元就の孫かその子供辺りが伊達政宗と  
同世代だったと思っただが」

「Ah? 毛利に孫がいるなんて聞いた覚えがねえぞ」

「・・・質問その二。天下はどの程度統一されてる？」

「Ah・・・まだ全然だな。奥州の周りじゃあ虎のおっさんとか、  
軍神とか、今川とか北条とかも元氣だし。魔王のおっさんも元氣だ  
し。最近じゃあ、豊臣とかいう新しい軍勢もでてきてるらしいしな」

「・・・混沌<sup>カオス</sup>だな・・・。まあ、いいや。政宗の話からして、君た  
ちはこことは違う世界から来たようだな」

「何でそんなことが解るんだ？」

「君たちがこの世界の過去から来たとするなら、矛盾点が多すぎる。  
さっき言ったこともそうだし、・・・虎のおっさんは武田信玄、軍  
神は上杉謙信、か？魔王のおっさんってのは織田信長だろう？」

「ああ」

「この世界ではその三人は伊達政宗が活躍した時代には既に死んで  
いたということになっている。・・・そういえば、徳川家康も織田  
信長の少し下ぐらいの年であつたはずだな」

「HA、信じられねえな」

「ボクには君が自在に英語を操っていることの方が信じられないよ。  
君が本当に伊達政宗だというならね」

「what？」

「だってさ、”南蛮人”はポルトガル語かオランダ語辺りを使って  
いたはずだろう？何でイギリス語なんだ？」

「???」

「・・・まあ、いいや。とにかく、そんな感じで、ボクは君たちは  
異世界から来たと判断した。さて、詳しい話を聞かせてくれないか

「？」

「・・・なるほど。つまり、なぜここにいるのか、詳しいことは解らないわけだ」

「ま、そういうことになるな」

「・・・そうか。ではしばらく家に滞在すると良い。部屋ならいくつも余っているしな」

「いいのか？」

「ここからでも行くあてはないだろう？ボクはそんなに心の狭い人間じゃないよ。父上も反対はしていないみたいだし」

桜花がそういった時、無月が戻ってきた。後ろには数人のメイドを引き連れている。彼女たちはそれぞれ料理をのせた四角いお盆を持っていた。

「夜食かい？ご苦勞様」

「いえ、これくらいお仕事ですし、当然のことですわ、お嬢様」

「でもありがとう。助かるよ。手の空いた者で彼らの部屋の手配を頼めるかい？隣同士で二部屋だ」

「解りました。すぐご用意いたします！」

メイドがきやあきやあ言いながらでいったのを後目に、桜花はお盆に乗っていた料理・・・どんぶりに入ったうどんに手をつけた。

「？君たちも食べたらどうだ？腹は減っていないのか？」

「Ah・・・」

「毒なら入っていないよ。原材料以外に入っているのはメイドさんのあふれる愛くらいだ。だいたい、殺してもこちらに利点はないしな」

「お前・・・!」

「事実だ。むしろ、この世界では殺人は犯罪だから余計な厄介事を抱え込むだけだな」

ふうふうとうどんを冷ましながら桜花は言った。無月は黙々とうどんを食べている。小十郎は不機嫌そうな目つきで桜花を睨み付けている。政宗はふっとため息をつくとうどんに手をつけた。

「政宗様?!」

「It's pretty good」(まあまあだな)

「ありがとう。彼女たちの代わりに礼を言っておくよ」

「桜花、父上、たっだいまー!」・・・」

「お帰り、兄上、姉上」

「・・・この人達、誰?」

青年は、桜花と一緒にいた、二人の見慣れぬ人物に目をとめた。

「今日からしばらくこの家に滞在することになった政宗と小十郎さんだ」

「ふーん。オレは秋月。桜花の兄だ。こっちはオレの双子の妹の春月」

「・・・」

「オレは伊達政宗。Nice to meet you」

「・・・片倉小十郎だ」

秋月と政宗は握手をした。

「そういえば、藍葉は？」

「もう寝ている。当たり前だろう？今、何時だと思っているんだ？」

「夜の11時」

「もう子供は寝る時間、と言うわけだ。you see？」

「はっはっは。こりゃ、一本取られたな」

話についていけていなかった政宗は、桜花にそつと尋ねた。

「・・・なんだ？その、藍葉ってのは」

「ボクの弟だ。たぶん、明日になれば会うことになるだろうさ」

桜花はそういうと、不敵に笑った。

## 水月 2

「やあ。昨日はよく眠れたかな？」

「・・・まあまあな」

メイドに連れられて食堂に入ってきた政宗と小十郎を見て、桜花はにこやかに声をかけた。食卓には他には無月と10才ぐらいだろうと推測される少年がついている。メイドに促されて政宗が桜花の前に当たる席の椅子に座ると、桜花は政宗に問いかけた。

「朝食はやはり、和食の方がいいか？それとも、洋食でも食べられるか？」

そういう桜花の前には、トーストと目玉焼きとベーコンとサラダが置かれている。政宗が和食にしてくれと頼むと、メイドは調理場の方へ向かった。

「藍葉、この人達はさっき話した政宗と小十郎だ。しばらくここで暮らすことになった」

「ボクは火狩藍葉と言います。よろしくお願いします」

顔を上げ、人なつこい笑みを浮かべてそういった少年を見て——正確には、少年の右目を見て——政宗と小十郎は動きを止めた。少年の右目は黒い眼帯で覆われていた。・・・政宗と同じく。政宗は内心の動揺を押し殺しつつ、答えた。

「オレは伊達政宗だ。 nice to meet you , too」  
「片倉小十郎だ」

小十郎はぶつきらぼうにいう。政宗は、内心でそれで桜花は昨日不敵に笑っていたのかと納得していた。桜花が口の端をあげて微かに笑っているのを見て、政宗はそれを確信したのだった。

「ボク、生まれつき右目がないから眼帯をしているの。政宗さんは？」

「オレか？・・・オレは小さい時に sick でなくしちゃった」

藍葉が無邪気に問うので、政宗は苦笑しつつ答えた。正直、右目を失った時のことは、まだどす黒い塊として政宗の心中で燻っていた。小十郎が腐った右目を取り出した時の恐怖もあるが、病の苦しみ、病にうち勝った後の醜くなった己に対する母の冷たい対応が政宗に暗い影を落としていた。

「政宗、食べないとご飯が冷めるぞ。藍葉、学校に遅刻するぞ、質問攻めにするのは帰ってきてからにしたらどうだ？」

「はい、桜花姉様。では、いってきます」

「いってらっしゃい、藍葉」

桜花は藍葉を見送ると、再び食事を再開した。政宗はそれを見て、自分の目の前にいつの間にか置かれていた食事を見た。ご飯とみそ汁、焼き魚、香の物。湯飲みに入った緑茶から湯気が立ち上っている。

「メイドさんの愛が込められているから覚めても美味しいかもしれないが、やはり、温かい内に食べた方が美味しいと思うが？」

まったく口を付けている様子のない政宗を見て、桜花は食事の手を止めて呼びかけた。ちなみに、小十郎は運んできたメイドに礼を言ったあとさっさと食べはじめている。

「s o r r y・少しぼうつとしてたようだ」

政宗がそういつて食事始めたのをみて、桜花は満足そうに微笑むとまた自らの食事を再開した。

「は？」

突然の桜花の言葉に、政宗はただただ驚くことしか出来なかった。「だから、今日は一緒に出かける、と言ったのだ。政宗達にも服の好みはあるだろう？」

得意のアルカイクスマイルを浮かべ、桜花は政宗に問いかけた。

「・・・あなたは、いいのか？」

「？」

「あなたは、用事とか無いのか？」

「ああ。まあ、大学の講義があると言えばあるが、ボクは問題ない」  
そういうと、桜花はニヤリ、と笑って続けた。

「何だ？ボクのことを心配してくれるのか？」

「っ、違っ」

「じゃあ、良いだろう。・・・翠霞<sup>すいか</sup>」

桜花は後ろに控えていた青年に呼びかけた。

「車を出してくれ。慣れていない者でも酔わないような、穏やかな物を頼む」

「解りました、お嬢様」

翠霞は一礼すると、どこかへ向かった。桜花はそれを目の端で見送ると、政宗を見て微笑んだ。

「では、初歩的なことだけ教えておくでしょうか」

「ついたぞ、政宗、小十郎」

車から軽やかに降りると、桜花は振り返った。そして意外そうな顔をする。

「まさか、小十郎の方が乗り物に弱いとは思わなかったな。いや、むしろ政宗が強かったのか？」

「あれくらいの速さなら、馬で慣れてる」

「・・・どれだけ速い馬なんだ」

桜花が呆れたようにいうと、政宗はふん、と鼻を鳴らした。

「伊達の騎馬軍団をなめるな、ってことだ」

「・・・騎馬軍団で有名なのは武田ではなかったか？」

そんなことをいつていると、青い顔をした小十郎がやっと車から降りてきた。それを見て桜花は少し心配そうな顔をする。

「大丈夫か？小十郎。辛いなら服を買いに行く前にその店に寄って休憩するか？」

「いえ、大丈夫です」

「・・・政宗、翠霞、どう思う？これはやせ我慢ではないのか？」

青い顔で答える小十郎を見て、桜花は政宗と翠霞に問いかけた。  
政宗は首をすくめ、翠霞は頭を振った。

「・・・兄上曰く、買い物とは戦場だそうだ。時に負傷者も出るらしい」

「・・・それは間違った認識ですよ、お嬢様」

結局、大丈夫だと言い張る小十郎の意見を無視して近くにあったカフェで休憩を取ることにした。店に入ってから、桜花はふと気がついた、と言うように政宗に問いかけた。

「政宗、コーヒーを飲んだことはあるか？」

「・・・」

「では、紅茶は？」

「・・・」

「・・・では、私が二人の分も飲み物を選ぶでしょう」

戦国時代に、コーヒーや紅茶があるわけがない。

「・・・何か、保護者付きでデートをしているようだな」

桜花が脈絡無くつぶやき、それを聞いた三人は吹いた。

「お、お嬢様・・・」

「何だ？翠霞？」

「一体、どういう意味でしょうか」

「そのままの意味だ。政宗の保護者は小十郎で、ボクの保護者は翠霞」

桜花の答えを聞いて、翠霞は無言で頭を抱えた。

「HA、それじゃあ、オレと桜花はloverって訳か？」  
「物の例えだ」

政宗が思うに、桜花は”黙っていれば可愛い”タイプだ。現に、遠巻きに彼らを見ている男やら女やらが何人もいた。勿論、女性が見ているのは政宗か、小十郎と少々癪だが翠霞もだろう。四人とも整った顔立ちをしている。桜花は少々童顔気味で小柄だが（でも割と巨乳の部類に入る）、残りの三人は背も高い。所謂、人目を引く一行、といったところだ。

「まあ、ボクは政宗の恋人になりたいとは思わないがな」  
「・・・何でだ？」

はつきりと断言されれば、政宗も（桜花が恋人になればいいとは思わないが）傷つく。

「政宗からはたらしの匂いがする。君は元いた場所で多数の恋人を泣かしたりしていそうだ。まあ、ボクはそもそも今のところ恋人などというものはいらないがね」  
「・・・」

確かに、政宗は割とたらしだ。ある程度好みなら、誰にでも（それこそ老若男女問わず）手を出してきた。しかも、今のところ、一人に落ち着こうという気はないし、妻はいない。正室どころか、側室もない。何度か婚姻の話は出たが、全て裏から手を回してぶち壊した。政宗にとって、今の目標は天下統一であり、世継ぎがどうこうという小十郎の言葉は、五月蠅いだけだった。

「どうした？政宗」  
「・・・いや、何でもねえ」  
「そうか」

桜花はそういうと、口の端を持ち上げ笑みを浮かべた。政宗は嫌

な予感を感じた。

「で？政宗は一体今まで何人の人間とやったんだ？」

桜花の爆弾発言に翠霞と政宗が吹いた。小十郎は口をぱくぱくとさせている。

「・・・どうした？」

「hey, girl. そういう話は真っ昼間にするもんじゃねえだろ」

「ボクは気になったことは気になった時に聞く主義だ。というか、そうしないと忘れる」

「忘れる」

政宗がいうと、桜花はぶーぶー文句を垂れた。それがあまりにも外見に似合っていたので政宗は笑いをかみ殺した。

「政宗なら男女別で百人斬りとか達成してそうだと思ったんだが」  
「・・・さすがにオレもそこまではやってねえよ」

てか、男女別って何だよ。どこまでも予想外な桜花の言動に、政宗は頭を抱えた。

買い物を終えて帰ると、昼食の時間だった。

「何かいいたいことでもあるのか？」

「……いや」

政宗はいいたいことはものすごく沢山——何でこんな時期に流しそうめんなんだとか、そもそもこれはどこから流れてきてるんだとか、誰がこんなこと言い出したんだよとか——あったが、飲み込んだ。桜花はそんな政宗の考えていることがほんの少し解ったのか、端的に今の状況を表した。

父上の気まぐれだ、と。

「父上はなぜだか、無類の麺好きらしい。昨日もうどんを持ってきただろう？」

「ああ、そういや、そうだな」

だからといってなぜ夏でもないのに外で流しそうめんをするのかは理解出来ない。しかもよく見れば、流れているのは温かいうどんやそばも混ざっている。もはや、何がしたいのかも解らない。

「……よかった。スパゲティは流れてないようだ」

もはや、つつこむことすら躊躇われた。そもそも、政宗には桜花のいうスパゲティが何のことなのかを知らなかったが。

「……なかなか、面白い昼餉だったな」

「ボクは疲れたよ。たまにあることだけど、できることならやめてもらいたいね」

桜花はソファに沈み込みながらいった。心なしか、眉間にしわが寄っている気がする。

「そういえば、政宗はここにいる間何をして過ごすつもりなんだ？」  
「何っていわれてもな・・・」

突然そんなことを聞かれても、思いつかなかった。政宗はずっと天下統一だけを目標にしていた。ここには、それはできない。だから、早く帰りたいとは思っているが。

「ふむ。やることが思いつかないなら、少しボクに付き合ってくれないか？」

桜花はそういつて立ち上がると、政宗に向かって微かに笑みを浮かべた。

「what is this？」

「楽器だ。これはピアノという・・・政宗は何か演奏出来る楽器はないか？」

「Ah、小十郎に少し笛を教えてもらったことがある」  
「笛、か・・・では、これはどうだ？」

桜花はいくつもある楽器のケースから、細長い形をした物を一つ選び出した。政宗がケースを開けると、中には銀色の何かごてごてとした物がついた筒が入っていた。

「what is this?」

「フルートという西洋の横笛だ」

「flute?」

桜花は政宗にそれを吹いてみるように促した。政宗はおそろおそろそれを吹いた。一瞬澄んだ音色がフルートから流れた。

「・・・そういえば、オレに何がさせたいんだ?」

「ヒマだから楽器でも演奏しようと思っただけ。一人でやるのもつまらないから政宗も巻き込もうと」

「・・・巻き添えか」

「巻き添えだ」

桜花はそういうと、楽器の内の一つを選び出した。

「何だ、それ」

「バイオリンだ」

桜花はそういうと、バイオリンを構え、弾き始めた。

「・・・けっこう、上手いもんだな」

「まあ、こんな物は適当だ」

「・・・適当なのか」

「ああ。ボクは楽譜を読みながら演奏するという芸当はできないからな」

それをするのが普通だろう。政宗は思ったが、何も言わなかった。

「こういう物は楽しんだ者勝ちなのだ」

そういうと、桜花は政宗にも演奏するように促した。バイオリンの音色とたどたどしいフルートの音色が響いていく。

### 水月 3

「ただいま帰りました！」

「お帰り、藍葉」

元氣良く帰ってきた藍葉を、桜花は微笑んで迎えた。そして、今日学校であったことを楽しそうに報告する藍葉と一緒に居間に向かった。

「あ、政宗さん。こんにちは」

「good afternoon 藍葉」

居間には政宗がいた。口の端を微かにあげて微笑んでいる政宗に、藍葉は少し躊躇った後、切り出した。

「あの、少しお話をしませんか？」

桜花が何かを察していなくなったため、居間は政宗と藍葉二人きりになった。

「で、何かオレに聞きたいこともあるのか？」

「・・・政宗さん、母親ってどんなものか知ってますか？」  
「Ah？」

突然暗い顔で切り出された藍葉の言葉に、政宗は眉間にしわを寄せた。政宗は”母親”という存在にあまり良い思い出がない。いや、良い思い出が全くないわけではないが、今現在、政宗の母親は政宗を嫌っているのだ。・・・命をねらうほどに。政宗は心の中で毒づいた。

「・・・ボク、母親というものがどういうものか解らないんです」  
「・・・どういう事だ？」

「いないんです。もう、・・・死んでしまったから」

そういえば、と政宗は思いだした。この家には母親と思われる存在はいなかった。今までまったく会わなかった。もしいれば、この家に暮らしているのならば、まったく会わないということはありません。ないだろうに。

「秋月兄様も春月姉様も桜花姉様も、みんな母親という存在と過ごした記憶はほとんど無いそうです。だから、聞くことができません。父上はあの通り、まったく喋らない人です」

「what？藍葉が知らないのはまあ、ありとして、何で他のやつも知らないんだ？」

「秋月兄様と春月姉様の母親も兄様達が幼いころに死んだそうです」  
「Ah？」

「父上が再婚して、その相手との間に生まれたのがボクと桜花姉様。その母親もボクを産んですぐに死んでしまったそうです」

感情の伺えない瞳で淡々と告げる藍葉を見て、政宗は言葉を失った。

「父上は二度も愛した女性を失ったことで言葉を失ったのだと、兄様は言っていました。それと、きつと父上は呪いでも掛けられているんだろう、と」

「は？」

「父上と結ばれた女性が二人とも二人の子供を産んだ後死んだんですよ？不自然にも程があるでしょう」

「・・・まあ、それはそうだが」

さすがに呪い云々は非現実的すぎるだろう、と政宗は思った。だが、口には出さない。

「オレに聞いても無意味だ」

「なぜですか？」

「オレには母親なんていねえ」

きょとんとして首を傾げた藍葉に、政宗はニヤリと笑って答えた。それを聞いて藍葉が頬をふくらませる。

「木の股から生まれたというわけじゃあるまいし、母親がいないなんて事、あり得ませんよ」

ムスツとしていった藍葉を見て、政宗は苦笑した。

「sorry・そういう意味じゃねえ。・・・オレの母親はオレが小さい時にいなくなっちゃったんだよ」

政宗を愛し慈しんでくれた”政宗の母親”は政宗が病を患い、醜い姿になったことで姿を消した。残ったのは醜い姿になった政宗を厭い、弟に父親の跡を継がせようと画策する”弟の母親”だ。

「！・・・ごめんなさい」

藍葉は政宗の母親も死んだ、ということだと思ったのだろう、申し訳なさそうに言った。

「気にすんな。悪気があった訳じゃないんだろう？」

「もちろんです」

「なら問題はねえよ」

政宗は苦笑しながらそういった。そんな時、ドアを開けて入ってきたものがあつた。

「藍葉、着替えて手を洗ってきたらどうだ？メイドさん達がおやつを用意してきたのだが」

「！はい、桜花姉様」

藍葉はそういうと自分の部屋に向かった。桜花はソファに座り込んで俯いている政宗を見た。そして、ふ、つと微笑みを浮かべた。

「政宗」

「なんだ？」

「泣きたい時は泣けばいい。ここに政宗が涙を流すことを咎める者はいない」

なんならボクの胸を貸そうか？桜花がいたずらっぽく笑って付け加えると、政宗は苦笑した。

「t h a n k s . b u t I c a n ' t」

「w h y ?」

「Surely, my brake don't work」(きつと歯止めが利かなくなる)

「No problem... Then I stop you」

(問題ない。その時はボクが君を止めてあげよう)

「ははっ... thank you」

桜花は政宗を抱きしめた。そしてばんばん、と安心させるように背中を叩いた。

「君がなぜそうなったのかは知らないが... 過去を振り返ることは悪いことではないし、逃げることも弱さではないぞ」

「what?」

「例え逃げたとしてもいつかまた立ち向かえばいいのだ。... 自分のできちゃんと準備をしてから」

所謂、戦略的撤退というやつだ。桃花はそういつて笑った。

「それに、柔よく剛を制す、というだろう？ 気を張ってばかりではいつか壊れてしまうぞ。時には息抜きもしなくてはな」

「息抜き、ねえ...」

オレは十分息抜き出来てるつもりだぜ？ 政宗はそういおうとしたが、桜花によって完全に口が塞がれたため、言えなかった。端的に言えば、完全に胸に顔を埋めさせられた。政宗が何度かタップすると、桜花は漸く腕の力を緩めた。

「？ 何だ？」

「きょんとした表情で聞いているんじゃないやねえ。死ぬかと思っただろうが」

「... 兄上が一番幸せな死に方は女性の胸の谷間で窒息死するこ

とだと言っていたのだが」

「だからって勝手に殺すな」

「冗談だ。殺すつもりは別になかったよ。ただ、政宗があまりにも強情なものだから実力行使にいつてみようかと」  
「・・・なんだそりゃ」

キレイだ（前書き）

現代パラレル

キレイだ

「佐助君のバカ！」

そういつて、彼女はでていった。オレはそれをただ黙って見送るしか出来なかった。

そもそも、オレ様と彼女は正反対だった。オレ様は辛党で彼女は甘党。お化けが苦手で一人でホラー映画を見られないくせにホラー映画を見たがる彼女と、アクションもののカンフー映画が好きなオレ様。生活が不規則でどちらかというと夜型のオレ様と、規則正しい生活を送り、夜更かしが苦手な彼女。

だけど、そんなオレ様と彼女は所謂恋人同士、だった。

オレ様と彼女が出会ったのは、高校生の時だった。出会いはオレ様と彼女が隣同士の席になったこと。オレ様が言うのも何だけど、変な学校だったから女の子は少なかったな。別に男子校って訳じゃなかったんだけど。彼女とは二年生の時、初めて同じクラスになった。そして、色々あって三年生の夏頃からつきあい始めたんだ。

「未練がましい、よな」

オレ様は天井を見上げた。彼女がでていってから、いろんな事が手につかなくなっていた。食事もちゃんと作らず、即席麺ですましたし、仕事もさぼってしまったし。改めてゆつくりと部屋を見回す。机の上には食べ散らかしたカップ麺の容器。電気はあれからずっとつけていない。服も脱ぎ散らかしたまんまだし、そういえば洗濯物も干しっぱなしになっていた気がする。

机の上に放り投げていた写真をまた手に取った。彼女とオレ様が笑顔で写っている写真。こんなの見ても辛いだけなのに、見ていたってあのころに戻る訳じゃないのに、オレ様は破り捨てることもできないでいた。

彼女は古風というか、変わった子だった。高校を出て、オレ様は都会の大学に進学し、彼女は地元の大学に入学した。それからずっと遠距離恋愛だったわけだけど、彼女は携帯電話もパソコンも上手く使えないからって便箋に手紙を書いて文通でやり取りしていた。もちろん、たまに電話をしたり、休みの日には互いに会いに行ったりしたけど。

オレ様は彼女にもらった手紙を取り出して、紙飛行機にした。そのまま部屋の中をとばす。なかなか遠くには飛ばない。きがつけば彼女の手紙のほとんど全てを紙飛行機にしてとばしていた。オレ様は部屋の中に散らばる紙飛行機を見て苦笑した。

「・・・DVDでも見ようかな・・・」

とりあえず、気を紛らわせよう。そう思って、オレ様は何度も繰り返し試みて内容も覚えてしまっているカンフー映画のDVDを手にとった。

「・・・佐助君の、バカ」

私はぽつり、と呟いたあと、目尻に浮かんでいた涙を拭った。  
発作的に佐助君の部屋から飛び出して来ちゃったけど、これからどうしよう・・・。私は少し考えた後、お兄ちゃんの家に行くことにした。

「お兄ちゃん」

「桜花じゃねえか。どうしたんだ？今日は猿飛と会うんじゃないかったのか？」

「・・・いいの。佐助君のことなんか、もう、知らないんだから」

「・・・？まあいい。そんなところに突っ立ってないで、入ったらどうだ？」

「うん」

「Ah? 桜花じゃねえか。何だ? 猿飛とケンカしたのか?」  
「・・・うう。政宗君」

私は政宗君の姿を見て、思わず抱きついた。お兄ちゃんが後ろで驚いて、呆れた顔をしている気がするけど、それは気にしないことにした。政宗君は私が泣いていることに気づいて、ぽんぽん、と優しく背中を叩いてくれた。政宗君、年下だけどもいい子に育ったみたいだ。きっと、お兄ちゃんの教育のたまものなんだろうな。

「桜花、落ち着いたか?」  
「・・・うん。ごめんね、政宗君」  
「no problem」  
「一体何があっただ? 桜花」  
「・・・あのね、佐助君が私の知らない女の人と同棲してたの」  
「「は?」」

「・・・猿飛のやつ、ホストとしてバイトしているとは聞いていた

が、まさか女を連れ込んでるとはな・・・I'm surprised

「桜花、勘違いではないのか？オレは猿飛が女性と同棲しているなんて話聞いた覚えないんだが」

「だって、女物のハイヒールが玄関にあつたんだもん」

「桜花のじゃねえのか？」

「私、ハイヒールなんて履いたことないし」

「・・・」

「お兄ちゃん、私、どうしよう」

「桜花がしたいようにすれば良いんじゃないか？」

「私がしたいように？」

「・・・桜花は猿飛のこと、まだ好きなのか？」

「・・・うん」

「じゃ、ちゃんと決着をつけなきゃな」

「決着？」

「佐助くーん、た・だ・い・まーV元気？」

「・・・由利」

「何々？何でこんなに暗いわけ？」

由利はそついうと電気のスイッチを入れた。部屋に灯りがともる。

「うわ、汚つ。佐助君とは思えない状態ね」

「五月蠅い。オレ様桜花ちゃんに振られて傷心なの。ほつといてよ」  
「桜花ちゃんに？何で？」

「知らない。掃除をしてると思ったら突然”佐助君のバカ！”って  
いつて飛び出して行っちゃったんだもん」

由利は散らかった部屋を片づけ始めた。その時、チャイムが鳴った。

「はい」

ぼうつとしているオレ様の変わりに由利が玄関にでた。

「どちら様ですか？・・・って、政宗君かあ。どうしたの？何のよ  
う？」

「hun、由利が猿飛の同棲相手って訳か。・・・なるほどな」

「！何で独眼竜の旦那がいるわけ？」

「桜花が”佐助が女の人と同棲している”って小十郎に泣きついて  
きたから様子を見に来たんだよ」

「・・・何で桜花が右目の旦那に泣きつくわけ？」

「hah？妹が兄貴を頼るのは当たり前だろ」

「あの、右目の旦那と桜花が兄妹？」

「知らなかったのか？」

「初耳なんだけど」

そういえば、彼女とオレ様は互いのことをあんまり知らないんだ  
と思って愕然とする。もう、2年も付き合っていたのに。

「ねえねえ、もしかして桜花ちゃんの言う”女の人”って私の事か  
しら」

「もしかしくてもお前だろ。猿飛、紛らわしいことしてんじゃねえ」

由利と独眼竜の旦那の会話を聞き流し、オレ様はぽつり、と呟いた。彼女の名前を。

「佐助君！」

「・・・桜花、ちゃん」

「久しぶり♪桜花ちゃん」

「え・・・？由利君、何で此処に？」

「何でって、佐助君と私でルームシェアしてるから。ルームシェアすれば家賃とか半分ですむし、色々便利なのよ」

「・・・もしかして、このハイヒールって・・・」

「私のでーす」

「・・・良かったあ・・・」

「どうしたの？桜花ちゃん」

「・・・もしかしてひつく、佐助君ひつく、私のこと嫌いになってひつく他の女の人とつきあい始めたんじゃないかってひつく、思ったからひつく」

「まあ」

泣き始めた彼女を見て、由利がオレ様に手招きをした。オレ様ははっとして彼女に駆け寄り、抱きしめた。

「馬鹿だな、桜花ちゃんは。オレが桜花ちゃんのこと嫌いになるわけじゃないじゃん」

「本当・・・？」

潤んだ目でオレ様を見つめる彼女を見て、オレ様はそっとキスをした。

「佐助君」

「桜花ちゃん」

「・・・いい雰囲気のところ悪いんだけど、玄関先でいちゃつくのはやめた方がいいと思うわよ」

オレ様が由利を睨むと、由利はため息をついた後、やれやれという顔をした。

「政宗君と小十郎さんがものすごく怖い眼で睨んでるんだけど」

オレ様は由利の言葉を聞いて内心びくりとして彼女の後ろを見た。

「くっ熱いねえ」

「・・・次に桜花を泣かせた時は、殺すぞ」

「お兄ちゃん、それはやりすぎ」心配しなくても、オレはもう桜花ちゃんを泣かせるつもりはないから」・・・佐助君」

「啼かせるつもりはあるけど」

「！／／さ、佐助君！」「hуゝ」「！！！」「まあ、佐助君  
つたら、大胆」

「ってわけで、旦那達はさっさと帰ってね」

「私はどうすればいいのよ」

「大丈夫。この部屋、全室防音だから」

「・・・準備良いわね、佐助君」

呆れた顔でそういう由利を気にせず、オレ様は赤くなっただま何

も言えなくなっている彼女を抱き上げた。

「オレ様がどれだけ桜花ちゃんのことを大好きか教えてあげる」  
「佐助君・・・」

「・・・Ah、もう二人のworldにはいつてら。行くぞ、小十郎」

「・・・はい、政宗様」

「またいつでも遊びに来てね、政宗君、小十郎さん」

「thanks」「はい」

## キレイだ（後書き）

由利って十勇士の由利鎌ノ介（あれ、字がウロい）の事だったりします。ちなみにおかま。

内容に関してはスキノマスイノツチの同名曲のオマージュ？です。

朧月夜 3（前書き）

ただ君の為だけに

### 朧月夜 3

「軍神さん、かすがさん、久しぶりー」

勢いよく戸を開け、満面の笑みで挨拶をした慶次を、かすがは睨み付けた。

「・・・前田慶次。何のようだ」

「あっちゃー、もしかして、お取り込み中だった？」

慶次はそういつてのほほんとした顔で頭を掻いた。かすがの傍らで小さな塊が動く。

「・・・ふああああ？どうしたの？はるひちゃん」

「月龍、目が覚めたのか」

あくびをかみ殺しながら、月龍は起きあがった。まだ眠いのか、片目をこすっている。

「んー・・・何？お客さん？」

「オレは前田慶次ってんだ。よろしくな」

「・・・ボクは月龍・・・」

満面の笑みで答えた慶次を見て、月龍は簡単に答えた。そして、暫くするとそのまままた眠ってしまった。

「・・・ねちまった。・・・もしかして、さっきの寝ぼけてたとか

言っのかな？」

「さあな」

「あ、まーくん」

月龍を訪ねた慶次を見て、月龍は一言そういい放った。慶次はそれを聞いて一瞬動きが固まる。

「・・・何でまーくん？」

「まえだとします、だろ」

こともなげに答える月龍に、慶次はため息をついた。

「・・・みんなには慶次とか慶ちゃんとか呼ばれてるんだけどな。慶ちゃん、じゃダメなのかい？」

「ダメ。ボクがけいちゃんって呼ぶのは一人だけだから」

びし、と月龍は慶次の目の前に指を突きつけた。可愛らしいその様子を見て、慶次は思わず笑みをこぼす。

「それって誰だ？」

「故郷に残してきた大好きな恋人」

「お！いいねえ。恋してるねえ」

はやし立てるように言った慶次の言葉を、月龍は無視してほう、と明後日の方角を見つめて呟いた。

「もう何年の付き合いになるかな・・・でも、出会ってからこんなに長く離れてたのは初めてだな・・・」

「そっか。早く恋人のところに戻れると良いな」

月龍の寂しそうな様子に、慶次も引きずられて暗くなる。だが、次の瞬間、月龍は何事もなかったように言い放った。

「それが簡単にいったら苦労しないんだけどね。帰り方はわからないし、軍神殿に引き留められるし」

「・・・あんたの故郷って何処なんだ？」

旅してる途中に立ち寄ったら文ぐらい届けてやるよ。そういうつもりで慶次は問いかけた。だが、月龍の答えは彼の予想を超えたものだった。

「異世界。平行世界だと思うよ。ユツキーちゃんと藤丸が同じ年で”らいばる”で、ハルちゃんとけんちゃんが戦以外では絶対顔を合わせないぐらい仲が悪くて、竹ちゃんを巡ってナオとハチが三角関係を繰り広げてて、かずちゃんが弟大好きな世界」

「・・・は？」

マシンガンのようにぽんぽん放たれた言葉に、慶次はぽかんとした。それを見て月龍はふ、と笑う。

「説明するのが面倒だから聞き流してくれと嬉しいな」

「ははは・・・」

慶次は苦笑するしかなかった。

はあ、と息を吐いて、月龍はぽつりぽつりと呟きだした。

「ボクは鬼でけいちゃんは風の精霊なんだ。二人で国中を旅して回りながら色々なものを見たよ。楽しいことも嬉しいことも、悲しいことも腹が立つことも、たくさんあったけ。・・・どちらかが死ぬまですつと一緒にいられると思ってたんだけどな・・・」

「・・・よく判らないけど、元気出せよ。もう会えないって訳じゃないだろう？」

「・・・うん」

脳天気な慶次の言葉を聞いて、月龍は寂しそうに笑った。

「そうだ。けいちゃんの名前、教えてあげる」

「？」

「慶次郎って呼ばれてるんだけど、本名は利益って言っただよ」

「え？」

慶次が思わず聞き返そうとした時、月龍は既に其処にはおらず、去っていく足音と鈴の音だけがしていた。

朧月夜 3（後書き）

月龍の元いた世界は創作戦国の世界で（r y

## 氷姫 2

どこからか歌が聞こえた。

——うーみーは ひろいーな おーきーいーなー

「？」

我が不思議に思っ  
て周りを見回すと、兄上がそれに気がついて我に問いかけた。

「どうした、松寿丸」

「兄上、何か歌が聞こえませんか？」

「歌？」

兄上は私の言葉を聞き首を傾げた後、目を閉じた。

——ひがしーずーむー

「・・・本当だ。行ってみようか」

「待ってください、兄上」

我は、声がする方向に楽しそうに走っていく兄上を必死で追いかけた。

「うーみーにおふねーをーうかばーせーてー」

「女童？」

「この辺りでは見かけない子だね」

歌を歌っていたのは、ほんの2才か3才であろう、幼子だった。綺麗な着物を着ていると言うより、着られているという言葉がその様を表しているような気がした。色素の薄い、茶色がかった髪は肩のところで切りそろえられている。ふと、幼子は我と兄上の存在に気づいたようで、目を開けてきょとんとしてこちらを見た。

「？」

「君は誰だい？どこから来たんだい？」

「小早川雪菜、3さい。おとーさんと、おかーさんと、しちごさんのおまいりにきました！」

兄上が問いかけると、幼子は元気良く答えた。その瞳はよく見ると黒ではなく、微かに緑がかった灰色だった。

「小早川？・・・じゃあ、君の父親と母親は何処にいるんだい？」

小早川といえば、毛利の親戚筋にそのような名字の者がいるのだから、その者達の子供なのだろうと兄上は思ったようだった。だが、雪菜は顔を曇らせた。

「・・・わかんないの」

「？」

「ぴかってなって、みんないなくなっちゃったの」

雪菜の抽象的すぎて的を得ない言葉に、兄上は首を傾げた。

「????」

「それは何だ？」

我は、ふと、雪菜の持っていた長い紙製であろう袋に気がついた。綺麗に彩色されたそれは、良く言えば不思議な、悪く言えば面妖なものだった。

「これは、ちとせあめだよ。しちごさんでもらったの」

「? 飴？」

雪菜が袋の中から取り出した二本の内の一本を、我は手にとって見つめた。妙につるつるしているし、妙な紋様や文字が書いてある。飴には見えなかった。

「このふくろをびつてあけてたべるの」

「おお」

雪菜はそういいながらも一本の方を引きちぎるように皮をむいた。どうやら、べたべたしないように何かで包んであるということらしい。そんな我と雪菜を見ていた兄上が、暫くして口を開いた。

「・・・父親と母親の名前は言える？」

「んとな、おとーさんのなまえは月也で、おかーさんのなまえは弥宵だよ」

「ふむ・・・」

兄上は考え込むように口に手を当てた。雪菜はきよんととしてそ

れを見ていた。

「？」

「君はきつとどこか遠いところから来たんだね。でも松寿の小さいころにそっくりだ」

「しょうじゅ？」

「この子・・・僕の弟だよ」

兄上は我を示した。・・・本当なのだろうか。

「そういえば、おにいちゃんはだれ？」

「僕は毛利興元。雪菜ちゃん、ちよっとついて来てくれるかな？」  
「？うん」

雪菜はきよとした後、疑いもせずに兄上の手を取った。

「・・・というわけです」

「・・・？」

兄上は、雪菜のことを父上に話した。父上は黙って兄上の話を聞いていたが、暫くして優しい眼で雪菜を見、言った。

「そうか。雪菜、といったな」

「？」

「親が見つかるまで、僕の元にいるがいい」  
「？」

雪菜は兄上や父上の話している内容が理解出来なかったのか、始終きよんとしていた。

だが、結局親は見つからず、雪菜は毛利の家に養子としてはいることになった。

「兄上、こんなところで昼寝をなさっていたのですか？風邪をひかれてしまいますよ」

目が覚めて最初に飛び込んできたのは、雪菜の微かに緑がかった灰色の瞳だった。どうやら、我は日輪のあまりの心地よさに転寝をしていたらしい。

「・・・雪か」

「兄上、どうかされたのですか？」

心配そうに聞いて来る雪菜に、我は安心させるように微かに微笑んだ。

「・・・懐かしい夢を見た。初めて雪と会った時の夢だ」

「・・・そうですか」

雪菜はもう、ここに来た時のことは忘れてしまったらしい。無理もない。たった3つの頃の話だ。今となつては、雪が義理の妹であることを覚えて・・・いや、知っているのは、我だけなのかも知れぬ。我と雪はとてもよく似ている。だから、血の繋がりがなくてもしれぬとは、誰も思っておらぬのだ・・・。

## 氷姫 2（後書き）

実はトリップ話でした、と

氷姫 3 (前書き)

雪菜 7 歳くらい

### 氷姫 3

「兄上、待つてください」

危なっかしい足取りでふらふらとついてくる雪菜を見て、興元は微かに眼を細めた。

「はいはい。雪、足下に気をつけて」

「兄上、弥三郎は元気でしょうか？」

仏頂面の頬を微かに赤く染めながら聞いてくる松寿丸を見て、興元は微かに口の端をあげた。

「元気じゃないという話は聞かないから、元気なんじゃないかな」

「兄上、弥三郎さんとはどなたですか？」

「これから会う子のことだよ。・・・ほら、ついた。弥三郎君、入るよ」

「はい、どうぞ」

興元が部屋の中に向かって呼びかけると、中から答えがあった。

興元はそつと戸を開ける。

「興元殿、松寿丸君、久しぶり。・・・その子は？」

「妹の雪菜だよ」

「雪菜です」

自分よりだいぶ体が大きく、隻眼である弥三郎を少し怖がってい

るのか、雪菜は興元に隠れるようにして挨拶した。

「私は弥三郎。よろしくね、雪菜ちゃん」

弥三郎はにこりと隠れていない片目だけで雪菜に微笑みかけた。雪菜はそれを見て微かに微笑み返した。

「興元様、弘元様がお呼びです」

後ろから呼びかける声がして、興元は微かにため息をついた。どうやら、もう呼ばれてしまったらしい。

「わかりました。・・・弥三郎君、松寿、雪を任せたよ」

「「はい」」

「弥三郎さん、これは何ですか？」

弥三郎は怖い人でないと判断したのか、雪菜は無邪気に問いかけた。

「これ？かんざしだよ。・・・あ、そうだ。雪菜ちゃん、私がつけてあげる」

「？」

まだ幼いこともあり、雪菜は装飾品の類にはまだあまり縁がなか

った。当然、それを兄たちが持っているわけはなく、雪菜はかんざしを見るのは初めてだった。もちろん、それを使うことも。

「兄上」

暫くして戻ってきた興元に、雪菜は嬉しそうに呼びかけた。興元は雪菜の髪が綺麗に結われているのを見て取ると、眼を細めた。

「雪、綺麗に結ってもらったんだね。弥三郎君かい？」

「はい」

嬉しそうに答える雪菜を見た後、興元は弥三郎を見た。

「さすが弥三郎君だね」

「いえ、あまり褒められたことでもありませんから・・・」

「そんなことはないです。弥三郎のおかげで雪が喜んだんですから」

寂しそうにそういった弥三郎に、松寿丸は力説した。それを見て、弥三郎は微笑む。

「ありがとう。松寿丸君」

にこりと笑った弥三郎を見て、松寿丸の頬が赤くなったのを見て取った雪菜は、こっそりと興元に問いかけた。

「（兄上、何で松兄上は赤くなってるの？）」

「（松寿は弥三郎君のことが好きだからだよ）」  
「？」

ほれたはれたの問題は雪菜にはまだ理解出来なかったらしく、雪菜はかくり、と首を傾げた。

「また会いましょうね」  
「はい」「・・・ああ」

嬉しそうに再会を約束する雪菜と、不機嫌そうな松寿丸を見て、興元は微かに微笑んだ。

「またね、弥三郎君」

興元は弥三郎にそう告げると、雪菜と松寿丸の手をひいて歩き出した。

## 氷姫 4

「元親さん！」

息せき切って走り込んできた戦装束（但し、武器は手に持っていない）の雪菜を見て、元親は楽しそうに口の端をあげた。

「雪菜じゃねえか。珍しいな、お前が一人で来るなんて。どうかしたのか？」

「元親さん、力を貸してくださいませんか？」

元親の手を取ってきつ、とまっすぐ眼を見つめてきた雪菜に、元親はきよんとした。

「・・・なるほどな。他でもない雪菜の頼みだ。解った、力を貸すぜ！」

「ありがとうございます！」

雪菜の話を聞き、元親はそう答えた。雪菜は安心したように息を吐いた後、嬉しそうに礼を言った。

「あ、兄上！」

敬愛する兄の姿を見つけて雑兵を蹴散らしながら近づいてきた雪菜を見て、元就はふ、と微笑んだ。

「雪か。どうしたのだ？ もしや、雪もザビー様の教えを受けに来たのか？」

「・・・え？」

滅多に見ない元就の笑みと敵であるはずのザビーに様付けしていることにびっくりして雪菜の動きが止まる。元親はそんな幼なじみ達を見て怪訝な顔をした。

「おい元就、何言つてんだ？」

「我は元就ではない。サンデー毛利だ」

堂々と言い放った元就・・・いや、サンデーの袖を引いて、雪菜は訴えた。

「兄上、ふざけたことをおっしゃっていないで、帰りましょう」

「ふざけてなどいない。我はザビー様の教えに従い、ザビー様のために戦うと決めたのだ」

ふざけた様子など微塵もない（もともと、この男がふざけるなどということもよっぽどあり得ないのだが）サンデーを見て、雪菜はぺたり、と床に座り込んだ。

「兄上・・・」

「・・・雪菜、無駄だ。元就のやつ、真面目に洗脳されてやがる」

元親はそういつてそつと雪菜を支えて立ち上がらせた。雪菜は俯いたまま、肩を震わせた。

「・・・兄上の、バカッ」

雪菜は采配の持ち手の棒の部分でサンデーの頬を打った。その威力で、サンデーは吹っ飛ぶ。それを見ようとせず、俯いたまま雪菜はサンデーに訴えかけた。

「私では兵を上手く動かせませぬ。政も上手く出来ませぬ。・・・駒は、動かす者がいなければただの木偶なのです」

「・・・我は、雪を駒だと思ったことはない」  
「え？」

ぽつり、と呟かれたサンデーの言葉を聞いて、雪菜は驚いた表情で顔を上げた。

「オー、タクティシヤーン。お友達がたずねてきたのネー？」  
「・・・ザビー・・・諸悪の根元・・・」

後ろから聞こえてきたザビーの声に気がつき、雪菜はゆらりと振り返った。その顔には何の表情も浮かんでいない。それに気がつき、元親は雪菜が”氷姫”になったことが解った。そつと雪菜の側を離れてサンデーに駆け寄る。

「オー、アナタ、愛、知らないのネー？ザビーが教えてあげるヨ」  
「・・・笑止。この毛利雪菜、そのような甘言には乗りませぬ。燃え尽きなさい！！」

雪菜が采配を振り上げると、光がザビーに襲いかかった。雪菜の属性は兄と同じ、光である。普段は優しい雪菜だが、戦になると容赦がない。・・・というより、味方には優しいが、敵にはとことん厳しいのだ。さらに言えば、”氷姫”の時は兄と同じで、攻撃が敵味方関係無しに放たれる。いや、敵味方、などという些末な問題は気にしなくなる、とでもいうのか。射程圏内にいれば攻撃されかねないのだ。ただ、”氷姫”になっても敬愛する兄にだけは攻撃しないのだが。（ちなみに先ほどの采配での殴打は攻撃にカウントされないらしい）

「ノー！！！！」

「ザビー様！！！」

勢いよく吹き飛んだザビーに駆け寄ろうとしたサンデーを、襟元を掴んで元親が引き留める。

「・・・それくらいにしとけ、元就。それ以上は雪菜が怒る」

がくりと肩を落としたサンデーを見て、元親は面倒なことになりそうだと肩をすくめたのだった。

恋情など、無縁と思っていた（前書き）

珍しくも公式無視な話。SS

恋情など、無縁と思っていた

「月丸様」

「まつ、オレは月龍だと、何度言ったら・・・」

「ですが、まつめにとっては月丸様は月丸さまですもの」

「そういえば、オレを呼び止めたと言うことは、何か用があるのか？」

「ええ・・・。まつめは嫁ぐことが「知っている」え？」

「知っている、といったのだ。まつは前田の家に嫁ぐのだろう？」

「・・・止めないのですか？」

「なぜだ？オレはまつの恋人というわけでもなし」

そう、言葉で表す習った一言。”幼なじみ”それだけだ。

「幼なじみが好きな人と結ばれることを喜びはすれ、止める理由など無いだろう・・・利家は悪い男ではないし」

「・・・月丸様」

「まつ、オレのことはもう、その名で呼ぶな。幼名で呼びたいなら利家を犬千代と呼べばいい」

「・・・はい、月龍様」

ああ、ずっとその呼び名で呼ばれたと思っていたはずなのに、なぜこんなにも悲しいのだろう。

「月丸様」

「まつ、オレは月龍だと、何度言ったら・・・」

「ですが、まつめにとつては月丸様は月丸さまですもの」

「そういえば、オレを呼び止めたと言うことは、何か用があるのか？」

「ええ・・・。まつめは嫁ぐことが「知っている」え？」

「知っている、といったのだ。まつは前田の家に嫁ぐのだろう？」

「・・・止めないのでですか？」

「なぜだ？オレはまつの恋人というわけでもなし」

やめてください。それ以上、言わないでください。

「幼なじみが好きな人と結ばれることを喜びはすれ、止める理由など無いだろう・・・利家は悪い男ではないし」

「・・・月丸様」

「まつ、オレのことはもう、その名で呼ぶな。幼名で呼びたいなら利家を犬千代と呼べばいい」

「・・・はい、月龍様」

そんな悲しそうな顔で、笑わないでください。私は、貴方の笑顔が好きだったのですから。（でもその想いを伝えることはもう許されない）



## 禁断症状

じつとオレ様の頭を見つめていた一葉ちゃんが唐突に口を開いた。

「ねえ、佐助君。君の髪の毛、鬱陶しくない？」

「あー、確かにちよつと伸びすぎかも・・・って、一葉ちゃん、何持ってたんの？」

そこで、オレ様は一葉ちゃんが手に何か鮮やかな色をした得体の知れない物を持っていることに気がついた。一葉ちゃんはいこり、と笑うとそれをオレ様に見せた。

「これ？かにさん（バリカン・子供用）だよ」

「何それ？！ちよつと、何企んでんの？」

「これねえ、電池式で切る時”じよつきん”っていうの。ちつちやい子とか、これ使うと喜ぶのよ」

オレ様の訴えを聞こうともせず、一葉ちゃんはうつとりしたように言った。こんな一葉ちゃん、初めてだ。・・・たぶん。

「いや、そんなこと聞いてないから！」

「さあ、大人しくアタシに刈られなさい！！」

「？どうしたのでござるか？二人とも」

オレ様が必死に一葉ちゃんから逃げていると（忍びのオレ様でも簡単に逃げられない一葉ちゃんって一体何者なわけ？！）旦那が通りかかった。

「あ、旦那、丁度良いところに！一葉ちゃん止めて！」

「幸村君！でも君じゃアタシは止められないわよね。幸村君純情boyだもん。だから大人しくしなさい！痛くないし、ちょーっと頭が軽くなるだけだから！！」

うふふ、と笑ってういんくをした一葉ちゃんを見て、旦那は顔を真っ赤にした。

「一葉殿！破廉恥でござる！！」

「一体、何であんなに暴走してたわけ？」

なんとか落ち着かせて取り押さえた一葉ちゃんにオレ様は問いかけた。一葉ちゃんは苦笑いをした。

「あー、ちよつと禁断症状がね・・・」

「禁断症状？」

オレ様と旦那はつい、異口同音に尋ねてしまった。

「うん。アタシが美容師志望つてのは話したよね」

「ああ、”アタシの商売道具！”とかって騒いでたよね」

初めて一葉ちゃんに会った時、鋭いハサミとかよくわかんない道

具とかたくさん持ってて、ものすごく疑っちゃったんだっけ。

「っ／＼其処はおいといてっ、てか、忘れてっ、アタシの師匠、結構（色々）凄い人なんだけど、その師匠に一日最低一人の髪を切るように言いつけられてたわけ。こっちに來てからはずっと我慢してたんだけど、つい・・・」

「よくわかんないけど、それでオレ様の髪の毛を切ろうとしたわけ？」

「うん」

「何で”かにさん”？」

「だって、佐助君の髪の毛、鬱陶しいじゃない。いっそ、坊主が五分刈り位にしたらすっきりするかと思って」

一葉ちゃんはそういつてにつこりと笑った。

「っ、坊主とか、勘弁してよ」

さすがに坊主は、ねえ？

「別に、切らせてくれるなら佐助君じゃなくても、幸村君でも、他の人でも、誰でも良いんだけど・・・あんまり気軽に言えることじゃないでしょ？」

「だからってオレ様？」

「あら、”オレ様にできることなら何でも言ってよ”って言ったのは誰だったかしら」

「う」

そつえばそんなことを言ってしまったような。

「佐助、そんなことを言っただけでござるか」

「あー、あれはその場ののりというか・・・」

「酷い！アタシをからかったのね?!」

「佐助!」

「~~~~解りました。大人しく切らせてあげるから坊主は勘弁してよ?」

「やったーv」

「よかったでござるな、一葉殿」

「やれやれ。まあ、ちょうど髪が伸びすぎてたわけだし、一葉ちゃんも喜んでるみたいだし、まあ、いいか。」

## サンダル

「まったく、何でこんな時に限ってこんなヒールのあるサンダルを履いて来ちゃったんだか・・・」

暫く前から愛用している、あのヒールのないサンダルならばこんなに走るのに苦労しなかっただろうに。

「だいたい、此処、何処なのよ・・・」

私は誰にもなしに呟いた。

「はあはあはあ・・・もう、疲れて走れないわよ・・・」

大体、服装も何か時代錯誤だし、てかむしろ、此処何処なのよ。現代にこんな深い森が残ってるなんて驚きよ。携帯も通じないっていうか、圏外だし。一体何がどうなってるのよ。

「Hey, girl! what happened?」(どうかしたのか?)

「何だかよくわかんないけど、追われてんの。一体何なわけ? 女の子を集団で追い回すなんて」

「ham じゃ、オレが助けてやろうか?」

私はそこで初めて声の主を見た。それは、眼帯をした男だった。腰には6本も刀とおぼしきものを差している。

「・・・少し遠慮したいわね。何か別の困ったことに陥りそうだもの」

「まあ、そう言うなって。オレはあんたが気に入ったんだ」

「ふーん」

「見つけたぞ!!」

さつきから私を追いかけていた奴らだった。せつかく振り切ったと思ったのに。

「うげ。これってまさに、前門の虎、後門の狼ってやつ？」

「かもな」

私は奴らと男を見比べて、ため息をついた。

「・・・はあ。しょうがないから、貴方を頼ってあげる」

「口の減らないgirlだな」

「それはどうも」

強がりくらい言っていないとやってられないし。

「なんだお前」「その女はオレ達が先に見つけたんだ」

「雑魚は引っ込んでな。・・・Crazy Storm!!」

男は四本の刀を構え、斬りかかった。見る間に奴らは血まみれになって倒れた。

「・・・」

「どうしたgirl。口元がひくついてるぜ」

「・・・一体、何がどうなってるのよ！……！」

私の平穩は一体何処に行っちゃったのよ……！

## サンダル（後書き）

続きません。

## 歌い鳥 1

微かに、歌が聞こえた。

「アニキ、どこかにお出かけですか？」

「ああ。ちよつと散歩にでも行ってみようかと思ってな」

「気をつけて行ってきてください、アニキ！最近この辺物騒な連中がうろついてるらしいですから」

——それは不思議な夢の話

「？何だ？歌？」

聞こえてきた歌に興味を持った元親は歌の聞こえてくる方に向かって歩いていった。

——君は僕にもう死ぬと言った。僕は

「!?!」

歌っていたのは、少女だった。長い黒髪が風にさらさらと揺れている。

「私が死んだら、星の破片<sup>かけ</sup>を目印にして待っていてください、きつと、会いに行くから」

足下で木の枝がパキン、と乾いた音を立てた。

「？」

「よ、よう。綺麗な歌だな」

「あ、あ……う……」

「お、おい!!」

少女は止める間もなく、顔を真っ赤にして走って行ってしまった。

「……いつちまった……」

元親はぼんやりと少女を見送った。

「ん？ちよつと待てよ？」

”最近、物騒な連中がうろついているらしいですから”

「……あいつ、危ねえんじゃねえか？」

元親はそう呟くと、少女を追いかけた。

「いいじゃねえか。大人しくついてこいよ」

「う……」

「暴れんなって。怪我するぜ」

「そいつから手を離しな」

「「「「？」「」「」」

「大丈夫か？」

少女は元親の言葉を聞いてこくりと頷いた。そして、何かを言うとする。

「あ……う……」

「話せないなら、無理して話さなくて良い……って、お前さっき歌ってたよな。ってことは、まったくしゃべれない訳じゃないのか」

どうすればいいのか……元親がそう考えていると、ぽつりと少女は呟いた。

「・・・Who are you？」  
「へ？」

思っても見なかったことに、元親は間抜けな声を出す、少女は混乱気味に続けた。

「Who are you？ and Where is here？ why I'm here？ what I'll do？」  
「異国語？何でまた・・・あ、ああ、泣くな。落ち着け」

だんだん泣き始めてしまった少女に元親はおろおろしつつ落ち着けというように背中をぼんぼんと叩いてやった。

「sorry：sorry：but：I：can't：stop…」

「すまねえ。オレは異国語はよくわかんねえんだ。だが、知り合いに一人異国語が解るやつがいるから、そいつのところに連れて行ってやるよ」

「・・・thanks，but why are you gentle to me so much？」

少女はきょとんとした後、元親に問いかけた。

「？心配すんな。悪いやつじゃないから」

「・・・story is not engaged」

肩を落として呟いた少女を見て、元親は首を傾げた。



## 歌い鳥 2

「あんたがhamming birdか？」

「? I don't know. but I was helped him」

少女はきょとしながら答えた。少女が異国語を話すのを聞いて、政宗は少しびっくりした顔をしていたが、すぐに面白そうに口端をあげると、自分も異国語で少女に問いかけた。

「ah... why are you talk in this language? you can speak Japanese, can't you?」

「Yes. I can speak Japanese. but I can't speak Japanese, when I see stranger」

「・・・何て言ってた？」

少女と政宗のやり取りを黙って聞いていた元親は、たまらず政宗に問いかけた。

「理由はしらねえが、知らない人の前だと日本語で話せねえんだよ。shyなbirdだな」

政宗はこともなげにそう言ったあと、ふと気がついたというように元親に尋ねた。

「そっぴゃあ元親、お前、名前とかは聞いたのか？」

「・・・聞いたんだが、よく判らなかつた」

「・・・sorryあんたは異国語が解らなかつたんだつたな」

がくりと肩を落として答えた元親を見て、政宗はしまった、という顔をして謝つた。そんな二人を見て、少女も申し訳ないという顔をする。

「ah...what your name？」

「My name is 零」

「零、where are you from？」

「I'm from...ah...I'm from other world」

零は暫く考えた後、そう答えた。政宗は耳を疑つた。

「...really？」

「yes.I think so.I don't tell a lie...maybe I make a mistake」

「????」

ひたすら疑問符を浮かべている元親を見て、政宗はこつそりため息をついた。

「こいつの名前は零で異世界から来たんだとさ」

「はあ？マジか、それ」

「間違っているかもしれないが嘘はついてないって言ってる」

「本当の話なのか？」

元親が零の目を見て聞くと、零も元親の目をまっすぐ見つめて答えた。

「Yes, but I don't know why, and how I'm here」

「・・・政宗」

「何で、どうやってここに來たのかわかんないってさ」

その時、走ってくる足音がして、突然戸が開いた。

「ねえ梵、お客さん來てるって本当？」

「!!!」

突然現れた男にびつくりして、零は元親の後ろに隠れた。それを見て、政宗が機嫌悪そうに男を睨み付ける。

「・・・おい成実え、何考えてんだ？birdが怯えてるだろうが」

「I'm sorry: don't angry: please

...」

自分にすぐりつくようにくつつく零が微かに震えていることに気がついた元親は鋭い声で政宗に呼びかけた。

「政宗！お前も零を怯えさせてるってこと、解ってるか？」

はっとしたように、政宗は零を見た。そして、零が震えていることに気がついて申し訳ないという顔をする。

「!shit、すまねえ」

「何々？その子零ちゃんって言うの？長曾我部殿の何？」

「成実、お前、ちょっと黙ってる」

楽しそうに零に話しかける成実に政宗は零に解らないように睨み付けた。零は律儀に答える。

「ah...he helped me and take me here」

「それだけ？」

「ah...maybe」

「なあんだ。てつきり、長曾我部殿が梵に恋人を紹介しに来たのかと」

つまらなさそうに言った成実の言葉に、元親と零は解りやすく動揺した。

「!!!」「you're kidding!!」

「落ち着け、二人とも」

真っ赤になった二人を見て苦笑しつつ政宗が呼びかける。暫くして落ち着いた元親が成実に問いかけた。

「何でそういうことになるんだ？」

「だって零ちゃん長曾我部殿にくっついてたし。そうだったら面白いなっ」

「あ...う...」

零はさらに真っ赤になって元親の袖を握った。

「？」

「shut up...」

その時、男の声が響いた。

「「？」」

「shut up, boy. Don't ask a loud thing to my princess」

「な、何かでた！！」「何だこりゃあ・・・」「・・・オレにもよくわからん」

突然現れた山吹色の髪と碧い目を持った男を見て、三人は驚いた。唯一驚かなかったのは、零だった。

「・・・唯、氷？」

「覚えてくれたのかmy princess・安心しろ、この無粋なboyはオレがやつとくから」

唯氷の言う”やつとく”の意味を察し、零は慌てた。

「・・・！stop, stop唯氷・don't gave him a hard time」

「何でだ？お前を泣かせたんだぞ？！」

「I'm not cry. so you don't have to attack him」

それはただの強がりだったが、唯氷ははあ、とため息をついた。

「：OK・I see, I forgive you, my princess」

「・・・一体、何なんだ？」

漸く口を開いた元親の言葉を聞いて、零は少し考えた後、答えた。

「ah - 唯氷 is my」オレは零の守護霊だ。零に手出しするやつは許さない。覚えとけ boys」

唯氷は零の言葉を遮りながら言いたいことだけいうと、さっさと姿を消した。

「・・・何だったんだ？ いったい」

暫くして政宗が呟くと、元親は肩を落として答えた。

「オレが知るかよ・・・」

「∴ I'm sorry about I can't speak Japanese」

「ん？ 日本語で会話出来ねえこと、気にしてんのか？」

元親が聞くと、零はこくりと頷いた。

「気にすんな、少しずつ慣れていきや良いんだ」

「∴ thank you 元親さん」

「おう」

「・・・なんだかんだで良い雰囲気じゃねえか」

「長曾我部殿もまんざらじゃないみたいだしね。梵の出る幕はない、かな？」

「黙れ成実」

### 歌い鳥 3

——僕に翼があつたなら、君の所へ行けるのだろうか

「歌？」

佐助は聞こえてきた歌に気がついて其方に向かった。

——君に出会えるだろうか

「何で君、こんな所で歌ってるの？」

「！」

突然背後から声を掛けられたことに驚き、零はびくりとして振り返った。

「：who are you？」

「異国語・・・？ああ、君が噂の歌い鳥ちゃんって訳だ。オレ様は猿飛佐助。君は？」

佐助が人好きのする笑みを浮かべて問いかけると、零はきょとん

とした後、答えた。

「my name is 零」

「えっと？」

「零」

佐助が聞き返すと、零は再び答えた。

「そっか、零ちゃんか。オレ様のこと、知ってる？」

「・・・真田十勇士」

「うん、そう。良く知ってるね」

「オレが教えてるんだ。当たり前だろ」

「！！」

突然背後から掛けられた声に、佐助は驚いた。先ほどまで、確かに周囲に人はいなかったはずなのだ。零は特に驚いた様子もなくきよんととして唯氷に問いかける。

「唯氷 why are you here？」

「オレの姫に不埒な輩が近づいたからだ」

ふん、と鼻を鳴らした唯氷の言葉に、佐助は睥睨する。

「不埒な輩って・・・オレ様のこと？」

「他に誰がいるってんだ？boy」

「・・・そうですね。何か、あんたって竜の旦那に似てない？」

佐助が思わず呟くと、唯氷はきよんとした後、不機嫌そうに答えた。

「竜の旦那・・・？・・・ああ、政宗か。オレとあんなガキを一緒にするな。オレはあいつの25倍は生きてる」

「25倍って50x才ってこと？」

「まあな」

「・・・何者なわけ？」

胸を張って肯定する唯氷を見た後、佐助は零に問いかけたが、零は首をすくめただけで答えなかった。変わりに唯氷が答える。

「オレは零の守護霊だ」

「・・・何それ」

佐助が呆れたように呟くと、唯氷は気分を害したようだった。

「生意気だな、boy・三枚おろしにしてやるうか？」

「冗談！それは勘弁願いたいね」

唯氷は零をちらりと見た後、はあ、とため息をついた。

「まあ、今のところはオレの姫がそれを望まないからやめというやるよ」

「それはどうも」

田舎の「クルマ（掘墓機）」

SS

## 日常の「コマ

「お館様!!」

「幸村!!」

「お館様!!」

「幸村!!」

「平和ですねー」

「あー・・・まあ、平和って言えば平和だけど・・・」

「だって、さすがに戦の時はあのようなことをしているヒマはないでしょう？」

「・・・残念ながら、旦那達は戦の時もあんなことしてるよ」

「まあ」

「二人とも戦の前でも終わった後でも殴り合ってるんだから。オレ様ぐらいしか止められないし」

「佐助さん、大変なんですね」

「そうそう。オレ様大変なのよ。昨日もやっと任務から帰ってこられたと思ったらすぐ別の用事を言いつけられるし。まったく、忍び使いが荒いなのなんのって」

「佐助さん、疲れているんですか？私の膝で良ければお貸ししますけど」

「え、本当？ありがと、一葉ちゃん」

「はい。私はたいしたことはできませんから」

「は、破廉恥でござ」落ち着け幸村。一葉が起きる「はい、お館様  
！」

「（だ、だが、しかし、膝枕など、破廉恥な・・・）」

「幸村！」

「はい、お館様！」

「佐助が一葉に膝枕されているぐらいで狼狽えるな。修行がたらんぞ！」

「！・・・お館様、某が間違っており申した！！」

「うむ！」

「お館様！！」

「幸村！！」

「お館様！！」

「幸村！！」

「（・・・一葉ちゃんが起きないように落ち着けてさっき言っ  
てなかったっけ？）」

私立娑婆羅学院 1（前書き）

現代パラレルシリーズ。十勇士大活躍。

呼び名って大事だね

「good morning 幸里」「幸里、今日も元気そうだな」  
「あ、チカちゃん先生に政宗先生。おはようございます」

後ろから声をかけられ、幸里が振り返ると、政宗と元親がいた。  
幸里はにこにここと挨拶を返す。

「hey 幸里、”先生”なんて他人行儀な言い方は無しだぜ。幼なじみだろ？だいたい、何でこいつは”チカちゃん”なんだ？」

「でも、ここ、学校だし。チカちゃん先生はチカちゃん先生でしょ？それにユキ、これでも譲歩したんだよ。それとも伊達先生って呼ぶ方がいい？」

「とんでもない  
no way」

首を傾げて幸里が聞くと、政宗は肩をすくめた。

「そつえば何でオレは”チカちゃん先生”なんだ？」

「え？えーとね・・・長曾我部先生って呼びにくいし、元親先生ってイメージじゃないよねって。それでチカちゃん先生」

「・・・誰と相談したんだ？」

「クラスのみんなが」

「・・・」

「あ、後ね、毛利先生が国語の時間に昔の写真を「！！あのオクラ！！」・・・チカちゃん先生行っちゃった・・・」

元親は走り去った。きつと、元就の所に殴り込みに行ったのだろ

う。

「・・・いったい、どんな写真だったんだ？」

少し興味がわいたので、政宗は幸里に聞いてみた。

「えっとね、チカちゃん先生の姫若子時代と毛利先生と一緒に写ってるのとか、チカちゃん先生のひねくれ時代とその手下が写ってるのとか、チカちゃん先生の「あいつの写真ばっかかよ」うん。後は巖島から昇る日輪とか、富士の山から昇る日輪とか、元旦の日輪とか「日輪ばっかかよ」うん。毛利先生、日輪マニアだもん」  
「・・・本当、ろくなteacher（先生）がいねえな、この学校」

政宗がしみじみというのを聞いた幸里はいった。

「政宗先生がいつちやダメだよ、先生なんだし」

「もちろんオレは別だ」

「・・・でも、まともな先生もいるよ」

「例えば？」

「秀吉先生とか、小太郎先生とか、猿飛先生とか」

「・・・教頭と風魔はともかく、猿はねえだろ」

幸里の答えを聞いて、政宗は顔をしかめた。

「竜の旦那、猿扱いはないんじゃない？」

「あ、猿飛先生。おはようございます」「げ、猿」

どこからともなく佐助が目の前に姿を表したのを見て、政宗はさらに顔をしかめた。

「おはよう、幸里ちゃん。ところでさあ、幸里ちゃんはどういう基準で先生を呼んでるわけ？名字で呼んでる人と名前で呼んでる人っているでしょ？」

「・・・えーと、何となく？」

幸里はそういつて佐助から目をそらした。

「何か、理由があるんでしょう？」

「うー・・・」

「ないんなら、オレ様のことも”佐助先生v”って呼んでよ」

「・・・理由、無い訳じゃないんですけど・・・」

「何？」

幸里が渋々いうと、佐助はにこにここと聞いた。

「大規模なファンクラブの有無です」

「へ？」「what？」

幸里の言葉に、二人は思わず目をきょとんとさせた。

「猿飛先生、ファンの人結構多いんですよ。名前で呼ぶと色々面倒ごとに巻き込まれそうなんで」

そういった後、幸里はちらりと政宗を見た。

「まあ、既に面倒ごとに巻き込まれること間違い無しなんですけど」「へえ、じゃあ、他に誰が人気があるの？」

「えっと・・・まず、竹中先生でしょ、幸村先生でしょ、チ力ちゃん先生でしょ、慶ちゃん先生でしょ、毛利先生でしょ、あと浅井先

生と政宗先生」

「・・・真田の旦那はともかく、何で前田の旦那と鬼の旦那と竜の旦那は名前呼びなの？」

「慶ちゃん先生は”前田先生”は三人いるからだよ。チカちゃん先生はみんなそう呼んでるし。政宗先生は幼なじみだし」

「オレ様も幼なじみでしょ？ほら、オレ様よく真田の旦那の所に遊びに来てたじゃん」

「交流無かつたし」

とりつく島もない幸里の言葉に、佐助はがくりと肩を落とした。それを見て、政宗が呟く。

「・・・何でそんなに幸里に名前と呼ばれたいんだ？」

「・・・竜の旦那には関係ないでしょ」

キンコーンカーンコーン・・・

「あ、ユキ、もう行かなきゃ。またね、政宗先生、猿飛先生」

チャイムの音が鳴つたのを言い訳に、幸里は教室へと向かった。

私立娑婆羅学院 2（前書き）

呼び名って大事だね 2

幸里は化学の授業で解らなかったことがあったので、光秀に聞きの来た。

「光秀先生、ちょっといいですか？」

「はい、どうぞ」

「ここ、教えて欲しいんですけど」

「ああ、炎色反応ですね。これは――」

そんな二人を遠目に見つつ佐助は呟いた。

「・・・何で明智の旦那は名前呼びなんだろう」

「名字で呼んだら斬られそうになったといっていたでござる」

近くにいた望月が聞かれてもいないのに答えた。

「・・・」

「そういえば、オレ達の中で幸里に名字で呼ばれてるのは佐助だけになったらしいな」

昼休み。いつものように十勇士メンバーで集まって色々と情報交換をしている時、唐突に清海が言った。

「え、マジ？」

「マジ」

「佐助はずっと幸村様についていましたからね」

清海の言葉を受けて海野が答えた。

「小介も信之様にずっとついてたじゃん」

「ボクはちよくちよく幸里様の相手もしていましたから」

「・・・。そういえば、望月と海野は名前同じだろ？なんて呼ばれてるの？」

「もっちゃん先生」「うみちゃん先生」

「・・・それでいいの？」

「別にいいでござる」「問題はありません」

「そもそも、この中で普通に名前と呼ばれてるのってボクと清海と伊三と十蔵ぐらいでしょう？」

小介はそういうと、才蔵を見た。

「オレは才ちゃん先生と呼ばれている」

「私はユリカって呼んでゝっていったから、ユリカ先生ゝ」

「某はねじちゃん先生」

「いっそ、直接言ってみたら？」

「言ったけどばっさり斬られちゃった」

「・・・幸里ちゃん真面目だし、面倒事は嫌いだものね」

はあ、とため息をつく佐助をみて、由利は呟いた。

その日の夕方。幸里が家に帰ると、既に幸村が帰宅していて、ついでに佐助も一緒にいた。

「あ、佐助さんが来てたんですか？」  
「うむ」

時計を見ると、既に5：30である。

「あ、夕ご飯作らないと。佐助さん、ゆっくりしていつてくださいね」

幸里がキッチンに消えたのを見届けた後、佐助は口を開いた。

「・・・旦那、幸里ちゃん、オレ様のこと名前で呼ばなかった？」  
「？うむ。だが、いつものことだぞ」  
「へ？」

きょとんとした顔で答える幸村に、佐助は思わず間抜けな声を出した。

「幸里は”学校では礼儀をわきまえねばならぬ”と某のことも幸村先生、と呼ぶが、家では今まで通り幸兄様と呼んでくれるぞ」  
「・・・オレ様、幸里ちゃん手伝ってきます」

佐助はそういつとキッチンへ向かった。

「？佐助さん、どうしたんですか？」

「幸里ちゃん一人じゃ作るの大変だと思って」

「！ありがとうございます」

私立娑婆羅学院 3 (前書き)

保健室談義

「あら、幸里さん。どうしたの？」

保健室に入ってきた幸里を見て、帰蝶は首を傾げて聞いた。幸里は苦笑しつつ答える。

「例によって例のごとく、転んで怪我をしましてまって」

「あらあら。じゃ、洗って消毒をしなきゃね」

患部を洗った後、消毒をしている時、唐突に幸里は聞いた。

「そういえば、保健の先生は四人いますけど、男の先生は小太郎先生だけですよね。やっぱり、男の先生は少ないんですか？」

小さく首を傾げる幸里に、帰蝶はきょとんとして答えた。

「？あら、違「帰蝶先生、ちょっといいですか？」なんですか？由利先生」

「？」

手招きする由利に帰蝶は近づいた。（以下、括弧内は小声でのやり取り）

「（幸里ちゃん、私のこと女だと思ってるの。でも、私が男だって言わないでくださる？）」

「（何ですか？）」

「（私のこと、女だと思ってたら色々相談してくれるでしょ？）」

「（幸里さんなら女性相手じゃなくても相談してくれると思うけど・・・信頼されていれば）」

「小太郎先生、どうしたんですか？」

幸里が帰蝶を待っていると、小太郎が様子を見に来た。小太郎は幸里の傷と消毒薬を見て首を傾げる。

「・・・」

「これですか？帰蝶先生に消毒してもらってたんですけど、ユリカ先生に呼ばれて言っちゃったんです」

幸里の答えを聞くと、消毒薬を手にとった。

「・・・」

「あ、ありがとうございます」

「幸里ちゃんは、すぐ怪我をするのね」

小太郎による治療が終わった後、市が幸里に話しかけてきた。幸里は苦笑しつつ答えた。

「ユキ、どうにもドジなんですよ。何にも無いところで転んじゃったりとか。市先生はどうですか？」

「市は何もないところで転んだりはしないけど、何もないところで転ばせるのは得意よ」

「・・・何か、すごいですね・・・」「・・・」

「（・・・あれはつつこんじゃダメなのかしら）」

「（やめておいた方がいいわ。市先生、怒ると大変だから）」

「（ああ、あの謎の黒い手ね・・・）」

由利が一人でしみじみと納得していると、幸里がふと、気がついた、と言うように聞いた。

「そういえば、たまに出てくるあの黒い手って何なんですか？」

「黒い手？」「！！！！」「」

「何か、ズザーって感じの」

”ズザー”を表しているのか、手をわさわさと動かしながら幸里は言った。

「・・・？」

「幸里さん、そろそろ教室に帰った方がいいんじゃないかしら」

帰蝶がそういつて幸里に呼びかけると、由利がそれに合わせる。

「そうそう。そろそろ授業が始まる時間だし」

「・・・」

小太郎もこくこくと頷いた。このままだと幸里が地雷を踏む。三人の考えは一致していた。

「あ、本当だ。それじゃあ、失礼しますね」

「「またね幸里ちゃん（さん）」」

「はい。帰蝶先生、ユリカ先生、市先生、小太郎先生」

心持ちほつとした表情で三人は幸里を見送った。市は少し不満そうであったが。

## 紅蓮の虎姫 1（前書き）

婆娑羅学院と同設定主、但し舞台は戦国時代。信之は幸村の一個上。幸里10歳、幸村17歳、信之18歳。

## 紅蓮の虎姫 1

「幸兄様！ユキも戦います！」

「ダメでござる。幸里はまだ幼すぎる。ここで待っているでござる」

「信兄様！」

「幸里、大人しくしてなさい」

「佐助さん！」

「ごめんね、幸里ちゃんはここにいてね」

佐助はそういうと、戸を閉めた。

「・・・旦那、この戦い、負けるわけにはいかないね」

「某、元より負ける気はござらぬ」

「大丈夫。万が一幸と佐助が負けてもオレが幸里を守りますから」

「兄上」

幸村が情けない声を出すと、信之はくすくすと笑った。

「はは、冗談だつて。幸が負けるとは思っていないよ」

「旦那、虎の旦那、敵は竜の旦那・・・伊達政宗だ。油断は禁物だよ」

「某、腕が鳴るでござる」

政宗との再戦に燃える幸村を見て信之はため息をついた。

「・・・いつそ、独眼竜だけ幸に任せて、オレと佐助で他のを一掃しましょか」

「・・・虎の旦那、それ、本気で言ってる？」

「どっちだと思います?」

信之の意味ありげな笑みに、佐助はひっそりと冷や汗を流した。

「・・・てか、虎の旦那は幸里ちゃんを守るんじゃないの?」

「ま、そのつもりですけど。・・・ところで、一体独眼竜はここに何しに来たんでしょうね?」

「旦那と戦いに来たんじゃないの?」

「某と政宗殿との決着は未だついておらぬのでござる」

「なるほど。・・・だからってわざわざ訪ねてこなくてもいいでしょうに」

信之のつぶやきに、佐助は苦笑する。

「あはは・・・! 竜の旦那が来たみたいだ。オレ様、持ち場に向かうから。虎の旦那、旦那をよろしく!」

「ああ、遠慮無く行ってこい、佐助」

信之は笑顔で佐助を送り出した。そして改めて幸村に向き直る。

「さてと。オレ達も持ち場に着かなきゃね。幸、独眼竜との再戦が楽しみだからって持ち場を離れて向かっていったらダメですからね」  
「承知したでござる!」

「幸兄様!」

「おお、幸里。どうしたでござるか？」

やっと、部屋から出してもらえた幸里は、由利に幸村が負傷したと聞いて幸村の所に向かった。そして、幸村の元気そうな顔を見て安心すると、その横に寝かされている人物に目をとめた。

「幸兄様、・・・それ、誰？」

「政宗殿でござる」

「”おーしゅーひとつとー”の？」

「まさに」

確かに、その人物は眼帯をしていて、その脇には彼のものとおぼしき三日月の鍬形のついた兜や、小手や何かがおいてあった。

「何で政宗さんはそこで寝てるの？」

「それはね、幸里ちゃん。竜の旦那が真田の旦那と戦って引き分けて倒れたからだよ」

幸里が素朴な疑問に首を傾げると、部屋に戻ってきた佐助がその疑問に答えた。

「佐助さん。・・・だから幸兄様も佐助さんもぼろぼろなんですわね」

「あはは・・・」

そう納得した幸里に、幸村と佐助は苦笑した。確かに幸村がぼろぼろなのは政宗と引き分けたせいだが、佐助がぼろぼろなのは少々野暮用に巻き込まれたからなのだが。三人がそんな話をしていると、政宗が目を覚ました。

「・・・っ・・・？オレは夢を見てるのか？幸村が縮んでるように

見える・・・」

「違いますよ。ユキは幸兄様じゃなくて、幸兄様の妹の幸里です」

起き抜けに目に入ってきたのが、幸村ではなく、幸村にそっくり（でも小さい）な幸里であったためか、政宗が呟いたのを幸里は聞きつけた。幸里はむうと小さく頬をふくらませて訂正した。

「oh, sorry」

「・・・ソーリー？」

苦笑しながらそう答えた政宗に、幸里は首を傾げた。すると、後ろから声をかけられた。

「すまない、と言う意味ですよ、幸里様」

「海野さん」

十勇士の一人の海野だ。彼が政宗の言葉を解説したのを聞いて、政宗は目を輝かせた。

「Ah? あんた、異国語が解るのか？」

「ええ。・・・それにしても、噂通りすばらしい発音ですね。幸村様とは大違いです」

「海野・・・」

幸村様は私が何度訂正しても正しく発音出来ないんですよ。海野がそうぼやくと、政宗は苦笑した。

「で、オレは何でここにいるんだ？」

「今あなたが死ぬと、色々困るのでオレが助けるように言ったんですよ」

政宗の疑問に答えたのは、丁度部屋に入ってきた信之だった。またもや幸村にそっくりな信之を見て政宗が首を傾げる。

「・・・what? 幸村が、二人?」

「おお、兄上。では、あの時の人影は兄上でござったのか」

嬉しそうに言う幸村の言葉を聞きつけ、政宗は幸村に呼びかけた。

「hey 幸村、お前、brother がいたのか」

「ええ。オレは信之。幸村の兄です」

呼びかけに答えたのは信之だった。信之はにこりと人の良さそうな笑みで微笑んだ。

「で? さっきのはどういう意味だ?」

「あなたが死ぬと、国の力関係が変動します。なんだかんだ言っ、今この辺りの勢力図は安定しています。ですが、あなたが死ぬと・・・それが崩れる。それは避けたかったんですよ」

信之は具体的なことは言わず、言葉を濁した。

「なぜだ?」

「・・・今はまだ、その時期ではない、とだけ言っておきましょう」

信之の言葉に、さらに問いかけようと思っていた政宗の言葉は部屋の外からの呼びかけにかき消された。

「信之様、小十郎殿をお連れしました」

「政宗様!」

「hey小十郎どうし・・・た？」

怒りのオーラの具現化するのが見えそうなほどの小十郎の剣幕に、政宗の言葉も尻すばみになる。

「政宗様！私がどれだけ心配したと思っっているんですか？だいたいですね、将が単騎で突っ込んでいくなど「はい、ちよつと待つてくださいね」？」

そのまま説教に突入しようとした小十郎の言葉を、問答無用で信之が遮る。小十郎が信之を見ると、信之は腕を組み、眉間にしわを寄せていた。

「政宗殿に説教をするのはいいんですが、帰ってからにしてくださいませんか？幸里があなたの剣幕に怯えてるので」

信之はそういうと、ぎゅうと近くにいた政宗の着物の裾を握りしめて固まっている幸里を示した。ただでさえ強面の小十郎がすこめば、大抵の童は泣く。泣かずにすんだのは僥倖といえた。

「・・・それは・・・すまなかった」

「というわけで。政宗殿は連れ帰ってたっぷり一時ぐらいは説教聞かせてあげてくださいね。・・・まったく、はた迷惑な・・・」

信之の最後の一言はごく小声で呟かれたため、忍び達にしか聞こえなかった。だが、信之が怒っていることは皆に伝わった。

「・・・幸村」

「何でござるか？政宗殿」

政宗が幸村にそつと呼びかける。幸村は無邪気に聞き返した。

「お前のbrotherはおつかねえな」

「それは政宗さんが信兄様を怒らせるからですよ」

政宗の言葉に、幸村ではなく、幸里が答えた。佐助は内心、虎の旦那が優しいのは最愛の妹と弟だけ（でも弟には結構手厳しいことも言う）だと思ったが、口には出さなかった。

「そついや、girl、お前何歳だ？」

「ユキは今年で10才ですよ」

突然年を聞かれたことを疑問に思ったものの、幸里は素直に答えた。

「・・・3年経ったらオレの所に来ないか？」

「あげませんよ独眼竜」

政宗の言葉を聞きつけた信之が満面の笑みで答えた。

「・・・shit」

「そつでござる。某も許さぬでござるよ、政宗殿」

隣にいた幸村も、信之と同じく笑顔で答える。

「・・・hey幸村、目が笑ってないぜ」

「気のせいではござるよ、政宗殿」

幸村はまだ、笑顔だ。ただし、完全に目が冷やかである。政宗はこの兄弟が本当に恐いの笑っている時なのだと思った。怒りを全

面に出している時より、逆に恐い。なんていうか、黒い。

「ユキは政宗さんのこと、あんまり知らないのではつきりとは言えませんが、考えてみますね」

幸里は無邪気に言った。（政宗の言葉をそのまま、”政宗の所に仕官する”と言う意味だと思っっているに違いないと佐助は思った）

「・・・でも、ユキは幸兄様と信兄様とずっと一緒がいいなあ」

ごくごく小声で呟かれた幸里のつぶやきを聞き取れた者はいなかった。

紅蓮の虎姫 2 (前書き)

幸里10歳、幸村17歳、信之18歳。

## 紅蓮の虎姫 2

「幸兄様、お仕事終わった？」

執務をしていた幸村の元に幸里が顔を出した。幸村はにこやかに答える。

「うむ。あとはこれが終われば全てでござる」

「あのね、幸兄様。ユキ、お団子作ったの。幸兄様も食べる？」

「幸里がでござるか？勿論、いただくでござる」

幸里の言葉に、幸村は顔を輝かせた。好物の団子、しかも可愛い妹の手作りである。幸村が逃すはずがない。

「幸、幸里のお団子が食べたいなら早く執務を終わらせないと皆に食べられてしまうよ」

「なんと！では急ぐでござる！」

いつの間にか来ていた信之の言葉に、幸村は猛然と残っていた執務に取りかかった。そんな幸村を薄く微笑みを浮かべて信之は眺めていた。幸里は幸村の集中を乱さないようにこっそりと信之に話しかける。

「・・・信兄様、どうして幸兄様にあんなこと言ったの？」

「その方が幸が急いでくれるだろう？オレも早く食べたいからね」

「それじゃあユキ、佐助さん達にも伝えてきますね」

「はい、行つてらっしゃい」

幸里はちょこんとお辞儀をすると、十勇士達を探して小走りで部屋を出ていった。

「おお、美味そうでござるな」

皿に盛られた沢山の団子を前に、幸村はほおとため息をついた。

「ユキ、兄様達に食べてもらおうと思って頑張ったの。・・・ユリカさんにも手伝ってもらったけど」

「いいのよ、幸里ちゃんに頼られて嬉しかったもの」

幸里が申し訳なさそうに付け加えると、由利は急いでフォローする。そんな由利を見て海野はあることを思いだした。

「由利、まさかあなた、それで・・・」

海野は由利と組んで行う任務があつたのだが、すっかりすっぱかされ、仕方なく一人で行ったのだった。当然、本来よりも負担は大きかった。

「あら？幸里ちゃんの頼みはどんな任務よりも優先されるのよん」

由利の答えに海野は黙って頭を抱えた。ちなみに、幸里の前で由利を鎌之助と呼ぼうとすると鉄拳が飛ぶ。故に、幸里は由利のフルネームを知らないし、女性だと思っているのであった。



紅蓮の虎姫 3 (前書き)

幸里 8 歳、幸村 15 歳、信之 16 歳。

### 紅蓮の虎姫 3

幸村と信之が稽古をしていると、幸里がやってきた。

「信兄様、ユキにも稽古をつけてください」

「うん、いいよ。武器を取っておいで。幸は休憩ね」

信之は快く幸里の頼みを引き受け、幸村に指示を出した。

「しかし兄上、兄上は休まずともよろしいのでござるか？」

「途中で幸に交替してもらうつもりだから大丈夫。ってことで、幸は先に休んでね」

「・・・わかりもうした」

昼からの稽古は幸村も信之も同じ時間こなしている。だから、信之もいくらか疲れているはずなので、幸村は信之も休むべきだと思っただが、信之の言葉に、幸村は渋々引き下がった。幸村が邪魔にならないところに移動するのと入れ替わりに、幸里が訓練用の木槍を持ってきた。

「信兄様、持ってきたよ！」

「それじゃあ、始めようか」

「はい！」

「・・・このまんまだと、戦場にも出ていくって言いだすんじゃない？旦那、覚悟しときなよ」

道場の壁際の邪魔にならないところに座り込んだ幸村に、どこからかやってきた佐助が話しかけた。

「何の覚悟をでござるか？」

「幸里ちゃんが戦場に出ていくって言い出しても、戦場に出ていくことになっても、取り乱さない覚悟」

「・・・自信がないでござる」

「・・・旦那達、幸里ちゃんを溺愛してるもんね」

佐助がしみじみしていると、信之が幸村に呼びかけた。

「幸、交替だ」

「うむ！」

「虎の旦那は覚悟してるの？」

さっきまで幸村が座りこんでいた位置に同じように座り込んだ信之に佐助は聞いた。信之はふう、と息を吐き出すと汗を拭きながら答える。

「覚悟？覚悟なら幸里が馬に乗りたいと言いだした時からしますよ。・・・幸里が馬に乗りたと言いだしたのはオレ達が戦に行く時馬に乗るということを理解した時でしたから」

「・・・流石、虎の旦那」



紅蓮の虎姫 4 (前書き)

幸里 14 歳、幸村 21 歳、信之 22 歳

## 紅蓮の虎姫 4

「――あなた、一体何がしたかったんですか？」

信之は元就に刀を突きつけつつ、尋ねた。二人とも、自らと敵の血にまみれている。

「私の目的、か？ふふ・・・毛利の家が続くことだ」  
「なるほど。オレと同じというわけですか」

信之は目を少し細めて呟いた。それを聞いて元就の目が驚いたように少し見開かれる。

「何？」

「オレは真田家の存続と・・・できれば繁栄のためなら、幸村・・・弟とだって戦って見せますよ」

「・・・面妖な」

元就は、それだけをやつと呟いた。

「父上の遺言です。それに、両陣営に仲間がいれば家系が途絶えることはない。どちらかは必ず生き残る」

「くく、まさか我よりも冷徹なものがいようとは、な」

どこまでも淡々とした信之の言葉に、元就は逆に感心した。

「心外ですね。戦うとは言いましたが、殺すとは言ってませんよ」

「食えぬやつだ。まるで狐だな」

「狐はあなたでしように。．．．それにしても、あなた、そろそろ死にそうですね」

やれやれ、と呟いた後、信之はふと気がついた、とでも言うようにいった。それでも、元就に突きつけられた刀はぴたりと止まり、髪の毛の先ほども動いていない。

「．．．我は、まだ、死ぬわけにはいかぬ．．．！」

「．．．そういえば、可愛い妹の頼みを思い出しました」

元就のつぶやきに、信之は思いだしたように言う。元就は頭に疑問符を浮かべた。

「？」

「できる限り無駄な殺生はしないで」と、言うわけで

信之はそういうと、刀を鞘に戻し、元就を横抱きに抱きかかえた。所謂、お姫様抱っこである。

「！！我は、敵の情けなど、受けぬ！」

元就はよりにもよってお姫様抱っこをされていることがよっぽど不満だったのか、弱々しい動きながら、抵抗した。しかし、信之は意にも介さない。

「違いますよ。オレは男には情けはかけないと決めてるんです。あなたは、捕虜です。．．．なんだかんだ言っ、あなたも兵達に慕われているようですし、あなたに真田に従っていただければ、色々と手間が省けます」

「我が駒達に慕われている？何を戯れ言を・・・」

淡々とそう吐き捨てる元就を見て苦笑しつつ、信之は言った。

「まあ、それはそのうち解りますよ。あ、大人しくしててくださいね、傷に障りますから。・・・まあ、抵抗する気力もないみたいですよ」

信之はそういうと、小介に元就の武器・・・輪刀の回収を命じ、ひらりと馬に乗り、弟たちの元へ向かった。

「あ、信兄様。お帰りなさい！」

自らの前に馬を駆けさせて現れ、ひらりと馬から下りた信之に幸里は満面の笑みで言った。信之も笑顔で答える。ちなみに、いまだに元就を姫抱きしたままである。

「はい、ただいま、幸里、幸」

「・・・兄上、その者はまさか・・・」

幸村は信之の腕に抱かれている人を見て眉を寄せた。

「ええ。毛利の元就殿本人ですよ。殺す前に可愛い妹の頼みを思い出したので、連れ帰ってきました」

「信兄様、力持ちですね」

「いいえ、ただ元就殿が小柄で軽いだけですよ」

「・・・眠っているのですか？」

何の反応もない元就を見て、幸里が聞く。信之はににこと答えた。

「むしろ、気を失っていると言わべきでしょうね。医者はどこですか？この人一応半死人なんでほんとくと死にそうなんですけど」

そんなやり取りを繰り返している三人を少し離れたところで忍び達は見ていた。佐助がぼそりと呟く。

「・・・虎の旦那には、かなわないな」

「そりゃ、信之様ですから」

小介はそういつて輪刀を地面に突きさした。

紅蓮の虎姫 5 (前書き)

幸里 14 歳、幸村 21 歳、信之 22 歳

## 紅蓮の虎姫 5

「四国の長曾我部軍が攻めてきました！！」

焦ったように兵が駆け込んできて、信之に報告した。信之は眉を寄せて尋ねる。

「理由は？」

「たぶん、鬼の旦那と毛利の旦那が知己ってやつだったからじゃないかな」

何も答えられないでいる兵の代わりに佐助が答える。佐助は兵にもう下がってもいいと目で伝えた。兵は小さくお辞儀をすると去っていった。

「ふうん。元就殿の”敵討ち”に来たというわけですか」  
「どうするのでござるか？兄上」

面倒くさそうに言う信之に、幸村が尋ねる。信之は少し黙考した後、答えた。

「ふむ。そうですね・・・幸里は元就殿についていてください。それで、もし元就殿が目覚ましたら知らせてくださいね」

「解りました！」

「幸はオレと一緒に長曾我部軍をくい止めに行くこと。・・・この戦、元就殿が目覚めるか、長曾我部殿を説得出来れば必ずしも将を討たなくても収まります」

「承知したでござる」

「佐助は幸についてください。小介はオレと一緒に。由利は幸里についてください」

「はいはい、了解。虎の旦那」「わかりました」「了解」

信之の指示に従って、5人はそれぞれの持ち場に散った。

「・・・ここ、は・・・?」

「あ、目が覚めたんですね。よかった」

元就が目を覚まして最初に見たのは、嬉しそうな顔で彼の顔をのぞき込む幸里だった。

「・・・誰だ?あの信之とかいう者ではないな」

「信兄様の妹の幸里です。元就さん、もう二日も眠っていたんですよ」

「・・・」

元就が現状を把握しようと黙考していると、由利が幸里に話しかけた。

「幸里ちゃん、信之様に元就殿が目覚めたって伝えに行かないとね」

「ユリカさん、頼めますか?」

「任せて。すぐに行ってくるから」

「・・・待て」

思いも寄らぬ人物からの制止に、由利は内心首を傾げつつ動きを

止めた。

「？」

「外がなにやら騒がしいのはなぜだ？」

元就の問いに、幸里が平然と答える。

「ああ、それですか？四国の長曾我部さんが元就さんの”敵討ち”に来てるんです」

「何？！」

「今、兄様達が”説得”に行ってます。信兄様は元就さんが目覚めれば戦は収まるって言うてましたけど」

元就は少し考えた後、寝かされていた布団から出ようとした。

「・・・私も行く」

「！無茶よ！あなた、今朝までずっと死線を彷徨ってたんだから」

由利がさかさず待ったをかける。この辺りは病にかかっても鍛錬を欠かさずしようとする主人を持っているだけあって、慣れたものである。

「・・・五月蠅い・・・」

「・・・解りました」

押し問答を繰り返す由利と元就を見て、幸里はため息をついた。由利がびっくりしたような声をあげる。

「幸里ちゃん？！」

「では、まず衣を整えて、何か食べてください。そうしたらユキが

元就さんを連れて行きます」

とりあえず、由利の訴えを無視し、幸里は元就に言いつける。その瞳には迷いもためらいもない。

「幸里ちゃん、本気？」

「本気です。この人は言い出したら聞かないタイプの人だと信兄様も言っていましたし」

真剣な目で、なおかつ遠い目をして答える幸里を見て、由利はため息をついた。

「・・・解ったわ」

「おい、我はまだ従うとは・・・」

元就が抗議の声をあげるが、それには由利が黙っていない。

「五月蠅いわね。幸里ちゃんがせっかく譲歩してくれたんだから従いなさいよ。それとも、そんなこともできないの？」

「！・・・我を愚弄するか・・・」

険悪な雰囲気になった二人を見て、幸里は慌てて仲裁にはいる。

「ユリカさん落ち着いて。元就さんも」

「大体、あなた自分の状況を解ってるの？あなたは捕虜で、今朝まで死線を彷徨ってた重傷者で、この私と真田の虎姫が目の前にいるのよ？」

「・・・真田の虎姫、だと？」

元就は驚きでわずかに目を見開き、幸里を見た。幸里は少し照れ

ながらも答える。

「えと、恥ずかしながら、ユキは真田の虎姫として真田の三虎の一人に数えられています」

元就は少し考えた後、小さくため息をついた。

「・・・ふむ、従おう。衣と粥を用意せよ」  
「はい！」

幸里が部屋を出ていくのを確認した後、由利は元就を睨み付けつつ言う。

「・・・幸里ちゃんに酷いコトしたら、許さないから」  
「・・・さて、な」

元就の表情は読めない。

「はい、衣です。粥はすぐにできるそうですよ」  
「・・・着替えを見ている気か？」

替えの衣を元就に渡した後、そのまま座ってみている幸里に、元就はジト目で聞いた。幸里は首を傾げた後、答える。

「ユキは別に平気ですけど。・・・それに、一人で着替えられますか？」

「馬鹿にするでない。あと、我が気にするのだ」

ふん、と鼻を鳴らしていった後、元就は手で幸里と由利を追い払う仕草をした。幸里は苦笑しつつ従う。

「・・・解りました。終わったら、声をかけてくださいね」

「・・・そなたも出ぬか」

幸里が出た後も気にせず部屋の片隅にいる由利に、元就はジト目で訴えた。

「気にしない、気にしない。私忍びだし。・・・同性だし」

「・・・そなた、男なのか？」

目つきを鋭くして聞く元就に、由利は笑ってごまかそうとした。

「・・・えへ」

「・・・」

元就の眉間のしわが一本増えた。

「・・・では、行くぞ、虎姫」

「はい」

衣を着替え、粥を食べた元就は由利に支えてもらいながらも立ち上がった。

「・・・ちよつと、なんであなたが仕切ってるの？」

「ふん。そなたのような粗忽者に我が従えと？」

またもや険悪になる二人の雰囲気、幸里は焦れつつそうに訴えた。

「元就さん、ユリカさん、落ち着いてください。兄様達の所に行くんでしょう？」

「うむ」

「・・・じゃあ、私は先に行くわね」

由利はそういうと、さつと姿を消した。それを見送った後、幸里は元就に向き直る。

「はい。・・・元就さん、馬、乗れますか？」

「問題ない」

少しふらふらしてはいたが、元就は馬に乗った。幸里は、それを確認すると、馬の鞍に手をかけ、一気に飛び乗る。

「よつと」

「な?!」

元就の後ろに乗った幸里は、手綱を掴むと馬の腹を蹴った。馬を軽く駆けさせつつ、言う。

「ユキが元就さんを一人で乗せると思いましたか？ダメですよ。途中で倒れたらどうするんですか。では、しっかり捕まうててくださいね。とばしますよ！！」

幸里はそういつと、馬に一層早く駆けさせた。

紅蓮の虎姫 6 (前書き)

幸里 14 歳、幸村 21 歳、信之 22 歳

## 紅蓮の虎姫 6

「信兄様！幸兄様！」

「幸里！」

駆けてきた馬が元親をはねとばし、信之と幸村の前で止まる。

「つてて・・・一体なんだ？・・・あれは、元就！？」

「馬鹿者めが。今すぐ兵を止める。我の”敵討ち”など不要だ」

頭を掻きながら立ち上がった元親の目に飛び込んできたのは、己を見下ろす元就だった。

「・・・と言うわけです。納得していただけましたか？」

「・・・仕方ねえな。おい、野郎共！戦は中止だ！」

信之がにつこりと笑って言うと、元親は苦笑して自軍の兵達に呼びかけた。

「さて、と。長曾我部殿」

長曾我部軍の兵士達があらかた引いたのを確認した後、信之は元

親に向き直った。

「？何だ？」

「降伏してくださいね♪」

きょとんと聞き返した元親の首に、信之は神速の抜刀で刀を突きつけると、につこりと笑っていった。

「何?!」「兄上?!」「信兄様?!」

「・・・虎の旦那・・・」「・・・信之様・・・」

「・・・言うと思ったわ。・・・むしろ、やると思った、っていうべき?」

元親と幸村と幸里は信之の突然の行動に驚き、忍び3人はやれやれ、とため息をついた。

「敵を騙すにはまず味方から。さ、早く降伏してください。オレ、あなたを殺したくないんです」

「・・・くく、さすがは我を下した男だ」

唯一信之の行動に動じなかった元就が口の端で笑いながらいった。

「お褒めいただき、どうも」

信之は律儀に元就に礼を言った。その間も、刀はぴたりと元親に突きつけられているし、その笑みも浮かべられたままだ。

「さあ、長曾我部殿。命を取ろうとは思いません。真田に降ってください」

「・・・幸兄様、一体、どういう状況なのですか?」

最初からいたわけではないので状況をいまいち理解していない幸里が幸村に聞いた。

「兄上が刀を突きつけているのが四国を統一した長曾我部元親殿でござる。つまり、長曾我部軍の将」

「なるほど。だからあの人なんですね。ユキ、てつきりあの人が一番目立っていたからなのかと」

「くくく・・・」 「幸里・・・」

幸里の脳天気な一言に元就は笑い、幸村は困った顔をした。

「・・・わーったよ。オレ達はあるに降る」

「ありがとうございます」

元親はじつと鋭い目で信之を見つめていたが、ふっと眼光をゆるめそうだった。信之は礼を言うと刀を鞘に戻した。そんな二人の所に幸里の焦った声が聞こえてきた。

「・・・？元就さん？だ、大丈夫ですか？！何か、ものすごく顔が白いですよ？！」

「ああ、日輪が我に・・・」

話しかけてもまともな返事をしない元就を見て、幸里は兄たちに助けを求める。

「兄様！元就さんが！！」

「やれやれ、仕方のない人だ。どうせ無理を言って出てきたのでしよう？まあ、おかげで助かりましたが。でもそれで倒れてちゃ、しようがないですね」

そういつと、信之は馬に近づき、幸里に微笑んだ。

「信兄様？」

「幸里、交替です。元親殿と幸を連れて後から来てください。オレは元就殿を。行くよ、小介」

「はい、解りました」

信之と小介が城に戻っていったのを確認した後、元親は幸里に向き直った。

「そういえば、幸里って言ったか？あんだ、誰だ？」

「あ、自己紹介がまだでしたね。真田幸里です。兄様達がお世話になりました」

幸里がそういつて礼儀正しく礼をすると、元親が驚いた顔で聞いてきた。

「・・・まさか、あんたが噂の”真田の虎姫”か？！」

「そうですけど・・・そんなに驚くことですか？元就さんもだいぶ驚いていらっしまいましたけど」

幸里が首を傾げて聞くと、元親は苦笑しつつ答えた。

「・・・いや、”虎姫”がこんなに小さいとは思わなくてな」

「む」

「真田がこの数年でこの国の中央部を手に入れたのも、真田の三虎のおかげだって噂だしな。もっと、魔王の嫁さんとか、前田のまつさんとかみたいなやつだと思ってたんだよ」

幸里はその言葉に、小さく苦笑した。

「ユキ、まだ14ですから。最近やつと戦場に出してもらったくらいで、活躍してるのはほとんど兄様達ですよ」

「・・・マジで？」

「まじです」

「・・・オレと一回りも違うのか・・・」

「？」

しみじみと呟く元親に、幸里は首を傾げた。

「元親殿、幸里、そろそろ行くでござるよ」

自分だけ会話に入れてもらえなかったのが不満だったのか、幸村が不機嫌そうな声で言った。

「はい、幸兄様」「おう」

「佐助と由利は先に行ってしまったでござる」

「まあ」

紅蓮の虎姫 7 (前書き)

幸里 14 歳、幸村 21 歳、信之 22 歳

## 紅蓮の虎姫 7

「信兄様、ただいま戻りました」

「お帰り、三人とも。佐助も由利も先に帰ってきてるよ」

一番最初に部屋に入った幸里が信之に挨拶をする。信之はいつものようににこにここと答えた。幸里は元就の様子を見て、少し声を落として信之に聞く。

「・・・信兄様、元就さん、眠ってるの？」

「うん。途中で起きてなんか暴れたから、小介に頼んで眠り薬を盛ってもらいましたけどね」

「・・・兄上・・・」

あまりにも淡々と、且つににこにこと言われる言葉に、幸里は少し元就を気の毒に思った。

「で？どうすればいいんだ？」

「とりあえず、元親殿には今まで通り、四国を治めてもらいます。ですが、オレ達の要請があった時は兵を出してください。いいですね？」

そういえば指示を出していなかったな、と信之は国を治める将に降ってもらった時の彼の決まり文句を言った。それを聞いて、元親は確認のために聞き返す。

「おう。それでいいんだな？」

「はい。四国のみなさんは、元親殿をとて慕っているようなので、下手にオレ達が治めようとするより、今まで通り元親殿に治めてもらった方がいいでしょう」

信之は微笑んでそう答える。元親は一瞬目を鋭くして信之に聞いた。

「・・・オレ達が反乱を起こすとは思わねえのか？」

「その時は遠慮無くあなたを殺して別の人が治めることになるだけです」

「・・・」

あつさりと紡がれた信之の言葉に、元親は黙り込むしかなかった。

「さて。次は九州ですね。・・・海野、報告を」

信之は丁度良いからそのまま話し合おう、と九州に偵察に行っていた海野を呼んで報告するように言った。

「九州は今、島津軍と・・・ザビーとか言う南蛮人に勢力が二分されています」

「ザビー？」

信之が聞き返すと、海野は頷いて、彼の所見を言った。

「ザビー教とか言う訳のわからない宗教の教祖です。異様な風体をして、奇声を発していました」

「・・・面妖な」

幸村は海野の言葉にそう呟いた。

「さて。ザビーと島津、どちらを先にしましょうか。元親殿はどちらの方が手強いと思います？」

「ザビーだ」

信之の疑問に元親は即答する。それがあまりにもきっぱりとしていたので、信之も思わず首を傾げた。

「なぜですか？」

「鬼島津が入信しちまってんだ。元就のやつも一回入信しちまったけど、オレがやめさせた」

しかも、地味に洗脳されていたし。元親は遠い目をしていった。

「・・・なるほど。では、一旦島津軍を仲間に入れて、それからザビー教に攻め入ることにしましょう。元親殿、島津軍との戦いに協力していただけますね？」

「拒否権はねえんだろ？」

苦笑しつつ言った元親に、信之は微笑んで返す。

「大丈夫。今すぐ行くなんて無茶は言いませんから。オレ達も疲れてますし。そうですね・・・一週間後に出発としましょうか」

「なあ、虎姫」

解散を告げられて廊下に出た幸里は元親に呼び止められた。ユキの名前は虎姫じゃなくて幸里なんですけど。とか内心思いつつそれを表に出さず、幸里は元親の呼びかけに答えて振り返った。

「何ですか？元親さん」

「真田は何で天下をねらい始めたんだ？確か、真田は武田の配下だったはずだろ？」

頭を掻きながら聞く元親の言葉に、幸里は少し、目を伏せて答えた。

「・・・色々、あつたんですよ」

「色々？」

「色々です」

ほんの少し、痛みをこらえるような表情をした幸里に、この話題は鬼門だったのか？と元親は慌てて話題を変えようと試みた。

「そういえば、”虎姫”が一人で豊臣軍を壊滅に追い込んだ、って噂は本当か？」

「！その話、どこから聞いたんですか？」

元親が切り出した話に、幸里は鋭い目で元親の服を掴んで聞いた。本当は胸ぐら辺りを掴みたかったのだろうが、いかんせん、身長差がありすぎて（あと元親の服装は半裸に近いので）幸里が掴んでいるのは元親の肩から垂れた布だった。

「どこだったかな・・・何分、ずいぶん前に聞いた話だからな、忘れちゃった」

幸里の剣幕に内心驚きつつ、元親は答えた。幸里はその答えを聞いて何か考え込んでいるようだったが、しばらくして布から手を離れた。

「・・・そんな噂、気にしない方がいいです」  
「は？」

じゃあ、何でそんなに焦ってたんだ？元親がそういう前に、幸里は言った。

「だって、そんなこと、ユキにできると思いませんか？」

幸里はそういうと、さっさとそこを立ち去った。

「・・・地雷、踏んじまったのか？」

後に残された元親はそういつて頭を掻いた。



私立娑婆羅学院 4 (前書き)

日常の「アム

ある日幸里が次の授業の教室に移動すると、丁度前の授業でその教室を使っていた人たちと鉢合わせた。その内の一人の少年が幸里に話しかける。

「お前、古典の真田先生の妹の真田だろ？」

「そうですけど・・・それが何か？」

それはまあ、事実なので、幸里は肯定した。ちなみに、幸里が幸村の妹だというのは結構有名な話で、（まあ、見た目そっくりなので解りやすいのだけど）たまにこうして話しかけられるのだった。幸里は今度は何の話なのだろうと内心辟易しつつ、それを表に出さずに首を傾げた。

「次の古典のテスト、何が出るか教えてくれよ！教えてもらってるんだろ？」

「む、失礼な。ユキは幸村先生にそんなこと教えてもらったりしてませんよ。・・・たまに、勉強を見てもらうことはあるけど」

テスト範囲とかそういう話ではなく、具体的にどんな問題が出るとか、そういうことを聞かれているのだろうと察し、幸里はむう、と頬をふくらませた。少年がなおも口を開こうとした時、後ろから聞き覚えのある声がした。

「そうでござる。某はそのような卑怯なことは好まぬ故、妹といえど、不正も臍履もせぬ」

「幸村先生」「真田先生」

自分の名前が聞こえて話を聞いていたのか、幸村はきっぱりとそういいきつた。だが、少年はなおも不満そうに言う。

「でも、真田、テストの時いつも良い点取ってるだろ」

「それはただ単にユキが勉強をちゃんとしているからです。きちんと勉強をしていればあれくらい、普通にとれます」

ちゃんと勉強をしているからこそそれなりによい点を取れているのに、それを不正をして取っていると思うなど、許し難い。幸里は軽く少年に敵意を覚えた。幸里と少年の間の空気が目に見えて険悪になった時、丁度よくそこによく通る声が飛び込んできた。

「hey、古典の話題で盛り上がるのは良いが、次この教室でやる授業はオレのEnglishだぜ」

「あ、政宗先生」

「げ、オレもう移動しなきゃ。じゃな!!」

少年は時計を見て慌てて自分の用具を持って駆けていった。それを見送った後政宗に向き合った幸村は眉間にしわを寄せた。幸里がその視線をたどると、それは政宗の手に向かっていった。

「・・・政宗殿、その手は何でござるか？」

「honeyが可愛いから抱きしめてるんだ」

政宗の手は、幸里の腰と胸の中間あたりに回されていた。幸村の質問に政宗は飄々とそう答えると、ニヤリと笑った。

「・・・ユキはhoneyではないですよ、政宗先生」

「そう堅いことは言うなっ」

政宗の過度のスキンシップはもはや気にするほどのことではないと学習していた幸里はとりあえずその点を指摘した。が、政宗は気にしなかった。幸村の機嫌が目に見えて悪くなる。

「政宗殿、幸里から離れるでござる」

「HA？何でだ？幸里は別に嫌がってないだろ」

だからといって許容しているわけでもないのだが。幸里は内心そう思っていたが、口には出さなかった。幸村の怒りのオーラが猛然と立ち上る。

「そういう問題ではござらぬ。早く離れられよ！」

「オー、愛、あふれてまーす！」

「あ、ザビー先生。こんにちは」

ALTのザビー先生が話に首を突っ込んできた。この先生はどうやら三角関係とか修羅場とかをかぎつけるのが得意であるらしく、度々そういう現場に現れて空気を読まない発言をしてその場の空気を別の方向にまとめ上げることが多々あることを幸里は知っている。というか、何回かみかけた。

「コンニチハ、ミスサナダ。ところで、ミスターサナダ、次の授業二行かなくてモよいのですか？」

「ぬお？！もうこんな時間か！某は行くが、くれぐれも政宗殿には気をつけるのだぞ、幸里。では！」

幸村は時計を見て驚き、幸里にそっくり残すと走り去った。幸里はそれを見送ると、政宗の顔を見上げて（身長の関係で必然的にそ

うなる）呼びかけた。

「・・・というわけで、離れてください政宗先生。授業の始まる時間ですよ」

「honeyに言われたんじゃ仕方ねえな。Hey, everyone, sit down your seats!」（おい、お前ら、席に着け!）

「・・・honeyじゃないって言うてるのに」

妙に張り切っている政宗を見つつ、幸里はため息と共にそう呟いた。

紅蓮の虎姫 8 (前書き)

幸里 12 歳、幸村 19 歳、信之 20 歳

## 紅蓮の虎姫 8

「！お館様！幸兄様！」

幸里は信玄に駆け寄った。信玄はそれを見て、幸里に向かって手を伸ばす。

「幸里・・・無事、か？」

幸里は信玄の側に座り込んで手を取った。信玄はその手で幸里の頬に触れた。

「・・・っ、はい、ユキは、大丈夫です」

「そうか。よかつ、た・・・」

信玄は幸里の無事を確認し、微笑んだ。それと同時にすっと、手の力が抜ける。

「お館様？・・・いや、イヤーーーー！！！！！」

幸里には、信玄の体から、だんだん熱が失われていくのが解った。

「甲斐の虎もこんなものか。他愛なかったね、秀吉」

「・・・うむ」

秀吉の顔がいまいち晴れないのは、目の前にうつむいて泣きじゃくる幸里がいるからか。

「・・・さない」

「おや？」

「許さない！！！」

幸里はそう言っ、涙を拭って秀吉と半兵衛を睨み付けた。

「！！！！」

二人が何に驚いたのか、幸里には解らなかった。

「幸里！もうやめなさい！」

信之の必死の呼びかけに、幸里の意識はふっと急上昇した。

「・・・信、兄様？」

「・・・酷い臭気ですね・・・」

見渡す限り、赤、赤、赤。全てが赤に染められ、幸里も誰のモノともしれない赤に染められていた。

「・・・兄、上・・・幸里・・・」

「幸！」

「幸、兄様・・・」

弱々しい声がした。信之は急いで幸村に駆け寄り、幸里はへちゃりとその場に座り込んだ。

「しっかりしなさい、幸！・・・これなら、今から治療すれば助かりますね。・・・小介」  
「は」

信之はさつと幸村の傷に目を注いだ。そして小介に命じて医者の方に運ばせることにした。そして、幸里が信玄に向かって何か小声で呟いていることに気がついた。

「・・・なさい」  
「・・・幸里」

「・・・ごめんなさい、お館様。ユキが、ユキがふがないせいで、こんな・・・」

幸里はぐすん、と鼻を鳴らした。顔についた血が涙で溶けて、血の涙になって床に落ちた。

「・・・帰りましょう、幸里」  
「でも！お館様をこんな所に置いていくわけには・・・！」

信之は、そつと幸里に呼びかけた。しかし幸里はその場を離れようとしなかった。

「後のことはオレと、十勇士の皆に任せて。幸里は今は休んでください」  
「・・・でも！・・・あ」

疲れが溜まっていて限界を超えてしまっていたのだらう、幸里は

小さく呟くと、気を失った。信之は慌てて幸里を受け止めた。

「幸里！！」

信之は幸里を抱きかかえ、立ち上がった。

「・・・無茶するからですよ。まったく、仕方のない・・・」

信之はそういつてふつと微笑んだ。

幸里が目を覚まして最初に目に入ったのは、心配そうに自分を見ている信之の姿だった。

「・・・信兄様」

「よかった。目を覚ましたんですね、幸里」

幸里は自分が意識を失う前のことを思い出し、身を起こすと、信之に問いかけた。

「幸兄様は？・・・お館様は？」

「お館様は無事、武田の皆の所に連れ帰りました。・・・葬儀は明日行われます。幸は「幸里！」」

「幸兄様！」

勢いよく戸を開けて、包帯だらけの幸村が部屋に飛び込んできた。幸村は幸里の姿を確認すると、その場に崩れるようにへたり込んだ。

「よかつ、た・・・幸里まで死んだら、どうすればいいのかと、某は・・・」

「ユキも、幸兄様が死んでしまったら、どうしようかと・・・」

本当に安心したように呟く幸村を見て、幸里の涙腺もゆるむ。

「よかつた・・・幸里が死なずにすんで。本当に・・・」

しかし、あまりにも平時と違う幸村の様子に、幸村は心配そうに顔をのぞき込んだ。

「・・・幸兄様、どうしたのですか？元気がありませんが・・・」  
「・・・幸里、お館様が死んでしまわれたのだ・・・お館様が・・・知ってます」

幸村の言葉を幸里は遮った。そしてそのまま続ける。

「幸兄様、お館様が死んだ時のこと、ユキは今も覚えています・・・最後まで、ユキのことを、心配して、くださって、だんだん、体が冷たく、・・・」「・・・もうよい。すまぬ、幸里」

幸里の声は、最後には涙声になり、とぎれとぎれになっていた。幸村は慌ててそれを遮り、やめさせる。しばらくして、幸里がぽつりと呟いた。

「・・・ごめんなさい」

「？」

「ユキがふがないばかりに、ユキが、豊臣にとらわれたばかりに、こんなことになってしまつて・・・」

「幸里のせいではない！某達の修行不足のせいなのだ！」

「でも・・・ユキがとらわれなければ、兄様も、お館様も・・・」  
「幸里」信、兄様・・・？」

信之はそつと幸里を抱きしめた。

「もう、泣かないください。・・・自分で自分を責めないでください。・・・いつものように、笑ってください」

「信、兄様・・・」

「幸も。いつもの元気な幸に戻ってください。・・・お館様は幸に元気がないと、悲しみます」

「兄上・・・」

しばらくして二人が落ち着いたころ、信之はぼつりと切り出した。

「幸、昔、お館様がおっしゃったことを覚えていますか？」

「お館様がおっしゃったこと？」

幸村は首を傾げた。信玄が言っていたことは沢山覚えているが、信之がいつているのがどの言葉のことなのか見当もつかなかった。

「男なら、乗り越えて見せろ」と。・・・幸村、幸里」

「「！はい！」」

真剣な声で呼びかけられて、幸村と幸里は反射的に勢いよく返事をした。

「日の本を取りましょう。．．．お館様の志を受け継ぎ、虎の国を．．．お館様の目指した国を作りましょう」

「はい、兄上！」「はい、信兄様」

三人のやり取りを見ていた忍びが、呟く。

「．．．流石虎の旦那。真田の旦那を一発で立ち直らせちゃった」  
「信之様ですから」

「．．．忙しく、なりそうだな」「．．．ですね」

戦が、始まる。

「．．．なぜ、お前達が．．．???」

勝頼ひきいる武田軍を襲撃したのは、あまりにも彼の予想を超えた人物だった。

「．．．勝頼殿。あなたはお館様の勇猛さは受け継がれましたが、知略と．．．気概や心意気、思想を受け継いではいません。．．．」

あなたは将の器ではありません。だから、真田はあなたに従わない」  
信之はそういつて真剣な瞳で勝頼を見据えた。

「真田は、独立して日の本を取ります」

「さようなら、勝頼殿。・・・そして、逝ってらっしゃい。オレは、あなたのこと、嫌いでしたよ」

にこりと微笑んで告げられた一言に、勝頼は思わず聞き返した。

「・・・なぜ？」

「あなた、幸里を側室にしようとしたでしょう？（まあ、阻止しましたけど）」

にっこり笑ってそう答えると、信之は勝頼を一刀のもとに斬り捨てた。信之が刀に付いた血を払って鞘に収めた丁度その時、幸村が姿を見せた。

「兄上！」

「ああ、幸。どうなりましたか？」

いつもの微笑みを浮かべて、信之は幸村に問いかけた。幸村はいつもの元気な表情で答える。

「ほぼ、制圧が終わったでござる。・・・勝頼殿は？」

「死にました」

淡々と告げられた信之の言葉をきき、信之の後ろに転がる”それ

”に目をやると、幸村は泣きそうな微笑みを浮かべた。

「・・・某は、勝頼殿のことは嫌いではなかったでござる。某や、幸里にもよくしてくださったし」

「・・・そうですか」

そして、どちらからともなく、”それ”に別れの言葉が投げかけられる。

「さようなら、勝頼殿」

二人はそこを後にした。

戦の後、夕日に染まる大地を眺めながら、幸里はぽつりと呟いた。

「・・・当たり前のことだけど、兵も”民”なんだよね」

「・・・ええ、そうですね」

「ユキ達は”民”が幸せに暮らせる世を目指しているはずなのに、何で”民”を不幸にしているんだろう・・・」

それは、素朴で、根本的な疑問だった。幸里は立ち上がって振り返った。

「信兄様」

「なんだい、幸里」

いつものように、信之は微笑みながら答える。

「できるだけ、死ぬ人を減らせないのかなぁ。・・・死は、周りの人を悲しませるから」

「死でしか収まらない時もあります。けれど、できる限り必要のない殺生をしないと約束しましょうか」

「はい」

信之の言葉に、幸里も微笑んで頷いた。

「幸も、ね？」

「うむ。殺すだけが決着の方法ではござらぬからな」

幸村も納得したように頷く。

「・・・ただ」

「ただ？」

「敵を助けて味方を殺すのでは本末転倒です。その辺りは気をつけてくださいね」

「はい」「承知したでござる」

「」「虎の名にかけて！」「」

「あは、あはは・・・」「うふふ・・・」「ふふふ・・・」

三人は声を合わせていった後、急に可笑しくなり、誰からともなく笑い出した。まるで、昔に戻ったみたいだと、幸里は頭の隅で思った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9762n/>

---

隊長の二次創作短編集

2010年10月9日11時36分発行